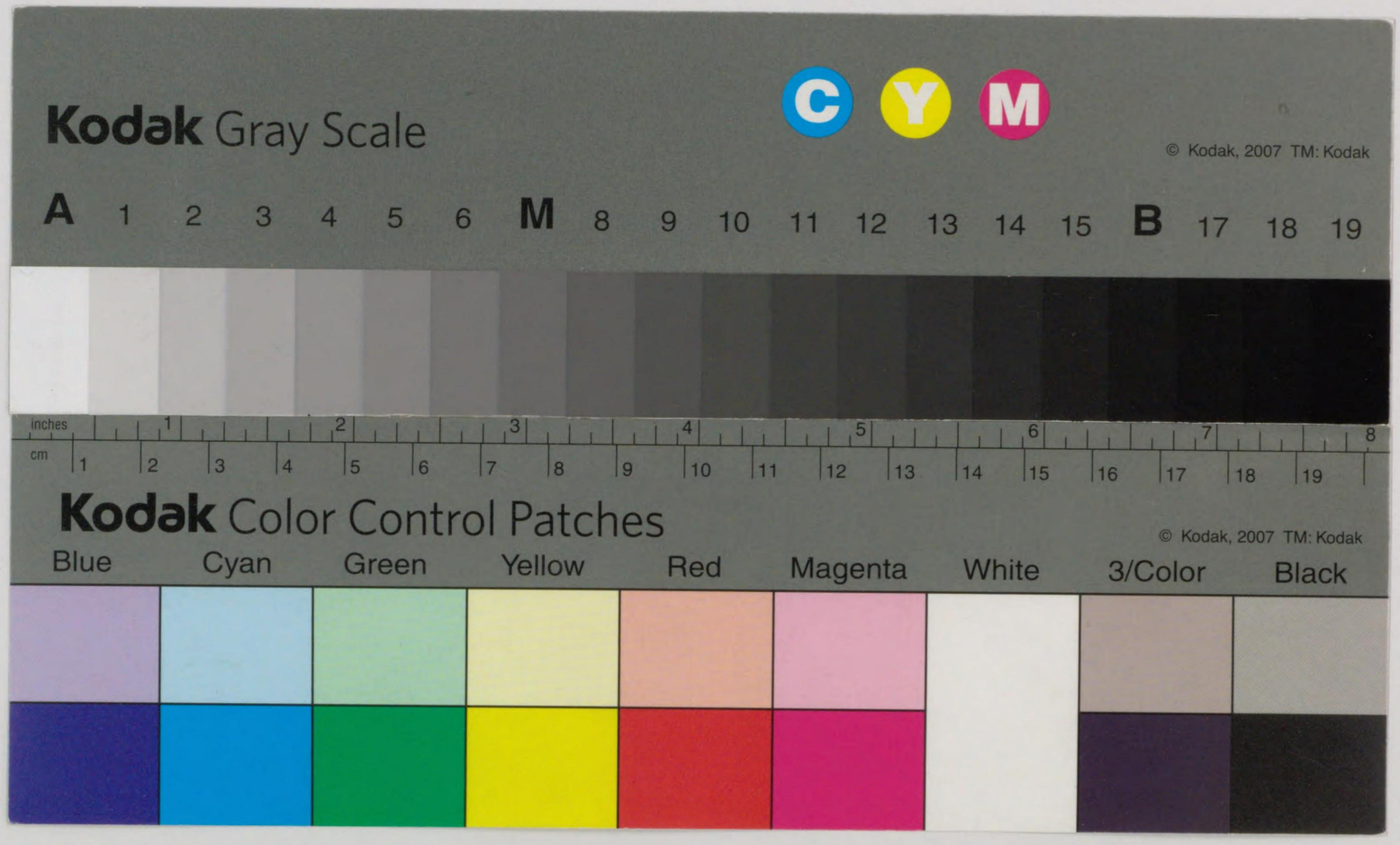

585
145

585-145
12005015237799

5.7.2

住吉和歌集

585-145

帝國圖書館藏

はしがき

掛まくも畏き、吾が住吉大神の、大津渟名倉の長峽に居らしむべし、よりて往きかふ船を看む、と宣ひて、神ながら鎭りまし、、此の住吉の地は、茅沼の海を隔てて、淡路島山をまともに眺め、內外の大船小船にぎび往きかひ、浪靜なる浦曲に松の綠色濃く、白鷺の群れ飛ぶわたり、朱の玉垣、虹の反橋見えかくれて、げに御心足らひの宮處なりけり。されば大神の御德は、遠くい敷きて、靈驗今にいやちこに、御代の爲、御國のため、はた吾が身の爲に、誠を致し願を掛くる人々、常に多かるはさる事にて、昔より敷島の道を守りまし神と仰ぎまつれば、彼の白樂天の侮を防ぎ、西行法師の驕を誡め給ひしなどの、說話さへ出來たる程とて畏き、雲の上よりはじめて、

昭和五年 帝國圖書館藏

月卿雲客、賤しき民に至るまで、歌に心を寄する者の、住吉の景色をながめたる、此の浦曲の歌枕をよみたる、はたは、心の誠を歌ひ出でて奉れる歌どもは、昔の勅選集、私選集、物語、紀行文どもに載れるも數多く、また御法樂とて奉り給へる、祈願として納めたてまつれるが、未だ世に知られざる等をも、松の木の葉のかき集めて、住吉和歌集と名づけ、こたび刷卷にものして、廣く世人に頒ち、いよ、大神の御德を仰がしめ、かつは古の人の跡とめて、敷島の道行くよすがともせむとして、茲に其のゆゑよしを記す。

昭和五年三月

官幣大社住吉神社宮司　副島知一

凡例

一、本書の前半は二十一代集を始め萬葉集新葉集其他の歌集日記物語等より住吉に關せる和歌を集め、後半は當神社の神庫に秘藏せる御歷代御法樂の和歌並に月卿雲客を始めて庶民に至るまで上下を通じて奉献せる和歌其の數頗る多くして全部を載せ難きにより御法樂の御製の外は住吉を詠めるもののみを錄す。

一、勅選集と他の集とに重出せるものは勅選集のみを採り、勅選集中重出のものは其儘とす。

一、作者名は殊更統一を計らず各集に載せたるまゝに從ひ同一作者の歌連續せるものには初にのみ名を記す。

一、寛文四年靈元天皇御法樂の卷【一三四頁】より以下は神庫に秘せるものにして今回始めて公刊せるものなり。

一、排列は集の年代卷の年次に依り同時代のものは勅選集及び御法樂を先とし他を後にせり。

一、歌の出所は括弧を以て集名を錄す。

一、表題文字は靈元天皇御法樂の卷物の中より採り、見返しは信實卿筆三十六歌仙のうち住吉の景を採れり。

一、事、忽卒の間に編せるを以て脫漏あるを免れず後日更に訂正せんとす。

住吉和歌集

霰打安良禮松原住吉之弟日娘與見禮常不飽香聞　長皇子御歌

あられ打つあられ松原住吉のおとひをとめと見れど飽かぬかも

大船之津守之占爾將告登波益爲爾知而我二人宿之　大津皇子御歌

おほふねの津守がうらにのらむとはまさしに知りてわが二人ねし

暮去者鹽滿來奈武住吉乃淺香乃浦爾玉藻刈手名　弓削皇子御歌

ゆふさらば鹽滿ちきなむ住吉の淺香の浦に玉藻刈りてな

墨吉乃得名津爾立而見渡者六兒乃泊從出流船人　高市連黑人

すみのえの得名津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる船人　角麻呂

清江乃木笑松原遠神我王之幸行處

すみの江の岸の松原遠つ神わが大君のいでましどころ　金明軍

印結而我定義之住吉乃濱乃小松者後毛吾松

しめゆひてわが定めてし住吉の濱の小松はのちもわが松　車持朝臣千年

鯨魚取濱邊乎清三打靡生玉藻爾朝名寸二千重浪緣夕菜寸二百五重波因邊津浪之益敷布爾月二異二日日雖見今耳二秋足目八方四良名美乃五十開回有住吉能濱

いさなとり濱邊を清み、打ち靡き、生ふる玉藻に朝なぎに、千重波よせ、夕なぎに、いほへ波よる、へつ浪の、いやしく〳〵に、月にけに、日々に見るとも、今のみに、あきたらめやも、白波の、いさきめぐれる住吉の濱

反歌

白浪之千重來緣流住吉能岸乃黃土粉二寶比天由香名

しらなみの千重に來よする住吉の岸のはにふににほひてゆかな　作者不詳

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隱耳哉戀度南

すみよしの粉濱のしゞみあけも見ずこもりのみやも戀ひわたりなむ　安倍朝臣豐繼

馬之步押止駐餘住吉之岸乃黃土爾保比而將去

うまの歩み押して止めよ住吉の岸のはにふににほひてゆかむ　石上乙麿

配二土佐國一時

懸卷裳湯湯石恐石住吉乃荒人神船舳爾牛吐賜付賜將島之埼前依賜將磯乃埼前荒浪風爾不令遇草菅見身疾不有急令變賜根本國部爾

かけまくも、ゆゝしかしこし住吉の荒人神船の舳に、うしはきたまひつきたまはむ、島の埼々より たまはむ、磯の埼々荒き浪風に遭はせず、草づつみ疾あらせず、すむやけくかへし賜はね、本の國べに

悔毛滿奴流鹽鹿墨江之岸乃浦回從行益物乎

くやしくも滿ちぬる潮か墨の江の岸の浦わゆ行かましものを

目頰敷人乎吾家爾住吉之岸乃黃土將見因毛欲得

めづらしき人をわぎへに住吉の岸のはにふをみむよしもがも

暇有者拾爾將往住吉之岸因云戀忘貝

いとまあらば拾ひにゆかな住の江の岸によるとふ戀忘れ貝

馬雙而今日吾見鶴住吉之岸之黃土於萬世見

うまなめて今日わが見つる住の江の岸のはにふをよろづよに見む

住吉爾往云道爾昨日見之戀忘貝事二四有家里

すみのえにゆくとふ道にきのふ見し戀忘れ貝ことにしありけり

墨吉之岸爾家欲得奥爾邊爾緣白浪見乍將思

すみの江の岸に家もがも沖に邊によする白浪見つゝ忍ばむ

住吉之名兒之濱邊爾馬並而玉拾之久常不所忘

すみの江の名兒の濱邊に馬なめて玉拾ひしく常忘らえず

住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去

すみの江の遠里小野の眞榛もてすれるころもの盛りすぎゆく

住吉之奥津白浪風吹者來依留濱乎見者淨霜

すみの江のおきつ白浪風ふけば來寄する濱を見れば清しも

住吉之岸之松根打曝緣來浪之音之清霜

すみの江の岸の松が根うちさらし寄りくる浪のおとの清しも

住吉波豆麻君之馬乘衣雜豆臘漢女乎座而縫衣叙

すみの江のなみづま君が馬のりごろもさにづらふあやめをするて縫へる衣ぞ

住吉出見濱柴莫苅曾尼未通女等赤裳下閏將往見

住の江のいで見の濱の柴なかりそねをとめらが赤裳のすその濡れて行かむ見む

住吉小田苅爲子賤鴨無奴雖在妹御爲秋田苅

すみの江の小田を刈らす子かもなきやつこあれど妹がみために秋の田刈らす

寄花

作者不詳

墨吉之淺澤小野之垣津幡衣爾摺著將衣日不知毛
すみの江の淺澤小野のかきつばたきぬにすりつけきむ日知らずも

詠二水江浦島子一一首并短歌

作者不詳

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得本良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣矜及七日家爾毛不來而海界乎過而榜行爾海若神之女爾邂爾伊許藝趍相眺良比言成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃內隔之細有爾携二人入居而老目不爲而永世爾有家留物乎世間之愚人之吾妹兒爾告而語久須臾者家歸而父母爾事毛告良比如明日吾者來南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復變來而如今將相跡奈良婆此篋開勿勤常曾己良久爾堅目師事呼墨吉爾還來而家見跡宅毛見金手里見跡里毛見金手恠常所許爾念久從家出而三歲之間爾墻毛無家滅目入跡此筥乎開而見手齒如本來家者將有登玉篋小披爾白雲之白箱出而常世邊棚引去者立走叫袖

振反側足受利四管頓情消失奴若有之皮毛皺奴黑有之髮毛白斑奴由奈由奈波氣左倍絶而後遂壽死祁流水江之浦島子之家地見

春の日の霞める時に、住の江の岸に出でゐて釣船の、とほらふ見れば、古の事ぞおもほゆる、水の江の浦島の兒がかつを釣り、鯛つりほこり七日まで、家にもこずて海さかを、すぎてこぎゆくにわたづみの、神のをとめにたまさかに、いこぎむかひてあひかゞらひ、ことなりしかばかきむすび、常代にいたりわたづみの、神の宮のうちのへの、たへなる殿にたづさはり、ふたりいりゐて老もせず、死もせずして永き代に、ありけるものを世の中の、くれたる人のわぎも子に、のりて語らくしまらくは、家に歸りて父母に、事をものらひあすのごと、吾は來なむと云ひければ、いもが云へらく常世べに、また歸りきて今日の如、逢はむとならば、このくしげ、開くなゆめとそこらくに、かためし事を住の江に歸り來りて家見れど、家もみかねて里見れど、里もみかねてあやしとそこに思はく、家出て三とせの程に墻もなく家もうせめやと、この箱を、開きてみてば元の如、家はあらむと玉くしげ、少し開くに白雲の、箱より出でて常世べに、たなびきぬれば、立走り、叫び袖ふりこひまろび、足ずりしつゝ忽に心氣うせぬ、若かりし肌も皺みぬ、黑かりしかみも白けぬ、ゆな〳〵はいきさへ絶えて後遂に、いのち死にける水の江の、浦島の子が家どころ見む、

反歌

常世邊可住物乎劒刀已之心柄於曾也是君

とこよべに住むべきものをつるぎ太刀しか心からおぞやこの君

懽逢

住吉之里行之鹿齒春花乃益希見君相有香聞

すみの江の里ゆきしかば春花のいやめづらしき君にあへるかも

寄水田

住吉之岸乎田爾墾蒔稻秀而及苅不相公鴨

すみの江の岸を田にはり蒔きし稻ひでて刈るまであはぬ君かも

住吉乃津守網引之浮笑緒乃得干蚊將去戀管不有者

すみの江の津守あびきのうけの緒のうかれかゆかむ戀ひつゝあらずは

住吉之城師乃浦箕爾布浪之數妹乎見因欲得

すみの江のうらみにしく浪のしく〳〵妹を見るよしもがも

住吉之濱爾緣云打背貝實無言以余將戀八方

すみの江の濱によるとふうつせ貝みなきことも吾れ戀ひめやも

住吉之敷津之浦乃名告藻之名者告而之乎不相毛恠

すみの江の敷津の浦のなのりその名は告りてしをあはなくもあやし

住吉乃崖爾向有淡路島柯怜登君乎不言日者無

すみの江の岸に向へる淡路島あはれと君をいはぬ日はなし

昔有二老翁一號曰二竹取翁一也此翁季春之月登二丘遠望一忽値二煮レ羹之九箇女子一也百嬌無レ儔花容無レ比于レ時娘子等呼二老翁一嗤曰、舛父來乎吹二此燭火一也於レ是翁曰唯唯漸趣徐行著二接座上一良久娘子等皆共含レ咲相推讓之曰阿誰呼二此翁一哉爾乃竹取翁謝レ之曰非慮之外偶逢二神仙一迷惑之心無二敢所一レ禁近狎之罪希贖以レ謌即作歌一首幷短歌

綠子之若子蚊見庭垂乳爲母所懷搓襁平生蚊見庭結經方衣氷津裡丹縫服頸著之童子蚊見庭結幡之袂著衣服我矣丹因子等何四千庭三名之綿蚊黑爲髮尾信櫛持於是蚊寸垂取束擧而裳纏見解亂童兒丹成兒羅丹津蚊經色

丹名著來紫之大綾之衣墨江之遠里小野之眞榛持丹穗之爲衣丹狛錦紐丹縫著刺部重部波累服打十八爲麻續兒等蟻衣之寶之子等蚊打栲者經而織布日暴之朝手作尾信巾裳成者之寸丹取爲支屋所經稻寸丁女蚊妻問迹我丹所來爲彼方之二綾裏沓飛鳥飛鳥壯蚊霖禁縫爲黑沓刺佩而庭立住退莫立禁尾迹女蚊髣髴聞而我丹所來爲水縹絹帶尾引帶成韓帶丹取爲海神之殿盖丹飛翔爲輕如來腰細丹取餝氷眞十鏡取雙懸而己蚊果還氷見乍春避而野邊尾回者面白見我矣思經蚊狹野津鳥來鳴翔經秋避而山邊尾往者名津蚊爲迹我矣思經蚊天雲裳行田菜引還立路尾所來者打氷刺宮尾見名刺竹之舍人壯裳忍經等氷還氷見乍誰子其迹哉所思而在如是所爲狹狹寸爲我哉端寸八爲今日八方子等丹五十狹邇迹哉所思而在如是所爲故爲古部之賢人藻後之世之堅監將爲迹老人矣送爲車持還來

緣子のわく兒が身には、垂乳し母に抱かぇ襁かく、這ふ兒が身にはゆふ肩ぎぬ、ひつりに縫ひき、うなつきの童が身には、ゆふはたの、袖つけごろも著しわれを、によれる兒等がよちには、みなのわた

か黑なる髪を眞櫛もて、こゝにかき垂れ取り束ね、擧げても纏きみ、解きみだり、うなゐ子の丹なす兒らに、つかふ色に懷しき紫の大綾のころも住の江の、遠里小野の眞榛もて、匂しゝきぬに高麗錦、紐に縫ひつけ、さしべ重ねべなみ重ねきて、うちそはしをみの兒ら、ありぎぬの寶の兒等が、うつたへは、へて織る布、日晒の麻てづくりをしきもなすは、しきに取りしき宿にふる、いなぎをとめがつまとふと、我にぞ來たる遠方の、ふた綾したぐつ、飛ぶ鳥の飛鳥男がながめ忌み、縫ひし黑沓さしはきて、庭にたゝずみな立ちそといさむるをとめがほの聞きて、我にぞ來たるみはなだの、栲の帶を引き帶なす、韓帶に取らし、わたつみの殿のいらかに飛びかける、すがるの如き、腰細に取りてかざらひまそ鏡取りなめかけて己が顏、かへらひ見つゝ春去りて、野邊をめぐればおもしろみ、我を思へかさぬつ鳥、來鳴きかけらふ、秋さりて山邊を行けばなつかしと、我を思へか天雲も、ゆき柵引きぬ、かへりたち路をくれば、うちひ射す宮をみな、さす竹のとねりをとこも忍ぶらひ、かへらひ見つつ誰が兒ぞとや、思ほえてあらむをかくぞしこなる古の、ささきしわれや、はしきやし、今日やも兒等にいさにとや思ほえてあらむを、かくぞしこなる古のかしこき人も、後の世の形見にせむと老人を、おくりし車持てかへりこし、

反歌　二首

死者木苑相不見在目生而在者白髮子等丹不生在目八方

死なばこそあひ見ずあらめいきてあらば白かみ兒らに老いざらめやも

白髮爲子等母生名者如是將若異子等丹所詈金目八

しらがして兒等もいきなばかくのごと若けむ兒らにのらえかねめや

娘子等和歌九首

端寸八爲老夫之歌丹大欲寸九兒等哉蚊間毛而將居

はしきやし翁の歌におほゝしきここのゝ兒らやかまけてをらむ

辱尾忍辱尾默無事物不言先丹我者將依

はぢをしぬび辱をもだして言も無くものいはぬさきに我は寄りなむ

否藻諾藻隨欲可赦貌所見哉我藻將依

いなもうもほりするまゝに許すべきかたち見ゆかも我も寄りなむ

死藻生藻同心跡結而爲友八違我藻將依

死にもいきも同じ心と結びてし友やたがはむ我も寄りなむ

何爲迹違將居否藻諾藻友之波波我裳將依

なにせむと違ひはをらむ否もうも友のなみ〳〵我も寄りなむ

豈藻不在自身之柄人子之事藻不盡我藻將依

あにもあらず己が身のから人の子のこともつくさじ我も寄りなむ

者田爲爲寸穗庭莫出思而有情者所知我藻將依

はたすゝき穗には出でじと忍びたる心は知れつ我も寄りなむ

墨之江之岸野之榛丹丹穗所經迹丹穗葉寢我八丹穗氷而將居

すみのえの岸野のはりに匂ふれど匂はぬわれや匂ひてをらむ

春之野乃下草靡我藻依丹穗氷因將友之隨意

はるの野に下草なびき我も寄り匂ひ寄りなむ友のまに〳〵

作者不詳

墨江之少集樂爾出而寤爾毛己妻尙乎鏡登見津藻

すみの江のをづめに出でてうつゝにもおのづますらを鏡と見つも

住吉爾伊都久祝之神言等行得毛來等毛舶波早家無

すみの江にいつく祝がかむごととゆくともくとも船は早けむ

民部少輔多治比眞人

天平五年贈二入唐使一歌　　作者不詳

虛見都山跡乃國青丹與之平城京師由忍照難波爾久太里住吉之三津爾舶能利直渡日入國爾所遣和我勢能君乎懸麻久乃由由志恐伎墨吉乃吾大御神舶乃倍爾宇之波伎座舶騰毛爾御立座而佐之與良牟磯乃崎々許藝波底牟泊々爾荒風浪爾安波世受平久卒而可敵理麻世毛等能國家爾

空見つ大和の國、青丹よし奈良の都ゆ押し照る難波に下り、住の江の、三津に船のりたゞ渡り、日の入る國に遣はさる、我が背の君を、かけまくのゆゝしかしこき住の江の、我が大御神船の舳に、うしはきいまし、船艫にみ立しましてさし寄らむ、磯の崎々漕ぎはてむ、とまり〳〵に荒き風浪にあはせず平けく、ゐて歸りませ本の國べに

反歌

奥浪邊波莫越君之舶許藝可敵里來而津爾泊麻泥

おきつ浪へなみなこしそ君が船漕ぎかへり來て津にはつるまで

陳二防人悲レ別之情一歌

大王乃麻氣乃麻爾麻爾島守爾我我多知久禮婆波蘇婆能波波能美許等

波美母乃須蘇都美安氣可伎奈渥知知能未乃知知能美許等波多久頭怒能之良比氣乃宇倍由奈美太多利奈氣伎乃多婆久可胡自母乃多太比等里之氐安佐刀渥乃可奈之伎吾子安良多麻乃等之能乎奈我久安比美受波古非之久安流倍之今日太仁母許等騰比勢武等乎之美都都可奈之備伊麻世若草之都麻母古騰母毛乎知己知爾左波爾可久美爲春鳥乃己惠乃佐麻欲比之路多倍乃蘇渥奈伎奴良之多豆佐波里和可禮加豆爾等比伎等騰米之多比之毛能乎天皇乃美許等可之古美多麻保己乃美知爾出立乎可之佐伎伊多牟流其等爾與呂頭多比可弊里見之都追波呂波呂爾和可禮之久禮婆於毛布蘇良夜須久母安良受古布流蘇良久流之伎毛乃乎宇都世美乃與能比等奈禮婆多麻伎波流伊能知母之良受海原乃可之古伎美知乎之麻豆多比伊己藝和多利豆安里米具利和我久流麻泥爾多比良氣久於夜波伊麻佐禰都都美奈久都麻波麻多世等須美乃延能安我須賣可未爾奴佐麻都利伊能里麻宇之豆奈爾波都爾船乎宇氣須惠夜蘇加奴伎可古登登能倍豆安佐婢

良伎和波己藝涅奴等伊弊爾都氣己曾

大君の、まけのまに〳〵さきもりに我が立ちくれば、はゝそ葉の、母の命は御裳の裾、つみあげかきなでちゝの實の、父の命はたくづぬの、白髮のうへゆ涙たり、なげきのたばくかこじもの、唯一人して朝戸出の悲しきわが子、新玉の年のを永く、相見ずば、戀ひしくあるべし、今日だにも、言どひせむと惜みつゝかなしびいませ、若草のつまも子どもも、をちこちにさはにかくみる、春鳥の、聲のさまよひ白妙の、袖泣き濡らしたづさはり、別れがてにも引きとゞめ、慕ひしものをすめろぎの、みことかしこみ玉桙の、道にいでたち岳の崎、いたむるごとに萬たび、かへりみしつゝはろ〴〵に、別れしくれば思ふ空、安くもあらず戀ふる空、くるしきものをうつせみの、世の人なればたまぎはる命も知らずうな原の、かしこき道を島づたひ、いこぎ渡りてありめぐり、我がくるまでに平けく、親はいまさねつゝみなく、妻は待たせと住の江のあがすめ神にぬさまつり、祈り申して難波津に、船を浮けすゑ八十かぬきかことゝのへて朝開き、我はこぎでぬと家に告げこそ

反歌

伊弊妣等乃伊波倍爾可安良牟多比良氣久布奈涅波之奴等於夜爾麻宇佐禰いへびとのいはへにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね

美蘇良由久久母々都可比等比等波伊倍等伊弊頭刀夜良武多豆伎之良受母みそらゆく雲も使と人はいへど家づとやらむたづき知らずも

伊弊都刀爾可比曾比里弊流波麻奈美波伊也之久之久二多可久與須禮騰いへづとに貝ぞひりへる濱浪はいやしく〳〵に高くよすれど

之麻可氣爾和我布禰波豆氐都氣也良牟都可比乎奈美也古非都都由加牟しまかげに我が船はてゝ告げやらむ使をなみや戀ひつゝゆかむ

兵部少輔大伴宿禰家持

須美乃江能波麻末都我根乃之多婆倍豆和我見流流乎努能久佐奈加利曾禰すみの江の濱松が根の下葉へて我が見るをぬの草なかりそね

（以上萬葉集）

秋

すみの江の松を秋風吹くからに聲うちそふるおきつ白浪

躬恒

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

住の江のきしに寄る浪よるさへや夢の通路人めよくらむ

藤原敏行朝臣

久くも成りにけるかな住の江の待つは苦しきものにぞありける　よみ人しらず

住の江のまつほど久に成りぬれば芦鶴のねになかぬ日はなし　兼覽王

題しらず　よみ人しらず

我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世經ぬらむ

住吉の岸のひめ松人ならば幾代か經しことはましものを　壬生忠岑

「あひ知れりける人の住吉に詣でけるによみてつかはしける

住吉とあまはつぐとも長居すな人忘れ草おふといふなり　貫之

深養父、戀しとはたがなづけゝむことならむ、下

道しあらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀忘れ草

（以上古今集）

和泉の國にまかりけるに海のつらにて　よみ人しらず

春深きいろにもあるかな住の江の底もみどりに見ゆる濱松

題しらず

住吉の岸の白なみよる〳〵は海士のよそめに見るぞ悲しき

まからずなりにける女の人に名たちければ濟はしける

さだめなく仇に散りぬる花よりは常盤の松の色をやは見ぬ

かへし

住吉の我が身なりせばとしふとも松より外の色をみましや

女のあはず侍りけるに

白涙のよる〳〵岸に立ちよりてねも見しものを住吉のまつ　貫之

住の江の波にはあらねどよとともに心を君によせ渡るかな

長明のみこの母の更衣さとに侍りけるにつかはしける　延喜御製

よそにのみまつは儚き住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

あひ知りて侍りける人を久しうとはずしてまかりたりければ門より返し遣しけるに

壬生忠岑

住の江のまつに立ちよる白浪の返るをりにやねはなかるらむ

年經ていひわたりける女に　源すぐる

久しくもこひわたるかな住の江の岸に年經る松ならなくに

女のもとにつかはしける　よみ人しらず

住吉の岸にきよするおきつ浪まなくかけても思ほゆるかな

か へ し　伊勢

住の江のめに近からば岸にゐて浪のかずをもよむべきものを

文などつかはしける女のことを床につき侍りけるに遣しける　源整

われならぬ人住の江の岸に出でて難波のかたを恨みつるかな

ひたゝれ乞ひに遣はしたるに裏なむなき、それは着じとやいかゞといひたれば　藤原元輔

住吉のきじともいはじ沖つ浪なほ打ちかけよ浦はなくとも

題しらず　よみ人しらず

なみ數にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらずなりやはてなむ

圓融院の御時御屏風の歌

住吉のきしのふぢ波わが宿の春のこずえにいろはまさらじ　平兼盛

延喜の御時月次の御屏風に　躬恒

神まつる卯月に咲ける卯の花は白くもきねがしらげたるかな　貫之

神まつる宿の卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける

住吉に國のつかさの臨時祭し侍りける舞人にてかはらけとりてよみ侍りける　貫之

音にのみ聞きわたりつる住吉の松の千年をけふみつるかな

題しらず　よみ人しらず

世の中を住吉としも思はぬに何を待つとてわが身へぬらむ

打ち忍びいざ住吉の忘れ草わすれてひとのまたやつまぬと

（以上後撰集）

津の國に罷れりけるに知りたる人に逢ひ侍りて　　忠見

都には住みわびはてゝ津の國の住吉ときくさとにこそゆけ

身の沈みぬることをなげきて勘解由判官にて　　源順

あらたまの年のはたちに、たらざりし、ときはの山の、やまさむみ、風もさはらぬふぢごろも、ふたたびたちし朝ぎりに、こゝろも空にまどひそめ、みなしこ草になりしより、物思ふことの葉をしげみ、けぬべき露のよるはおきて、夏はみぎはにもえわたる、ほたるを袖にひろひつゝ、ふゆは花かと見えまがひ、このもかのもにふりつもる、雪をたもとにあつめつゝ、文みていでしみちはなほ、身のうきにのみありければ、ここもかしこもあしねはふ、下にのみこそしづみけれ、誰こゝのつゆさはみづに、なくたづの音をひさかたの雲のうへまでかくれなみ、たかく聞ゆるかひありて、いひ流しけむひとはなほ、かひも渚にみつしほの、世には辛くてすみのえの、松はいたづらに老いぬれど、みどりの衣ぬぎすてむ、春はいつともしらなみの、浪路にいた

くゆきかよひ、ゆも取り敢へずなりにける、舟のわれをしきみしらば、あはれいまだにしづめじと、天のつりはな打ちはへて、ひくとしきかば物はおもはじ

返し　　能宣

世の中を思へば苦し、忘るればえも忘られずたれもみな、同じみ山の松が枝と、かるゝ事なくすべらぎの、千代も八千代もつかへむと、高き頼みをかくれぬの、下よりねざすあやめ草、綾なき身にも人なみに、かゝる心を思ひつゝ、よにふる雪を君はしも、冬はとりみつ夏はまた、草の螢を集めつゝ、光さやけきひさかたの、月の桂を折るまでに、時雨にそぼち露にぬれ、へにけむ袖の深みどり、色あせがたに今はなり、かつ下葉より紅に、うつろひはてむ秋にあはゞ、先づひらけなむ花よりも、木高きかげとあふがれむ、ものとこそ見し鹽釜の、うらさびしげになぞもかく、世をゝも思ひなすのゆの絶ゆる故をもかまへつゝ、吾が身を人の身になして、思ひくらべよもゝしき

に、あかし暮してとこなつの、雲居はるけきひとなみに、おくれてなびく我もあるらし

ある男の物いひ侍りける女の忍びて逃げ侍りて年頃ありて消息して侍りけるに

男よみ侍りける　　よみ人しらず

いまはともいはざりしかどやをとめの、立つや春日のふるさとに、歸りやくるとまつちやま、待つほど過ぎてかりがねの、雲のよそにもきこえねば、我はむなしきたまつさを、かくてもたゆく結び置きて、つてやる風のたよりだに、渚にきゐるゆふちどり、うらみは深くみつしほに、袖のみいとゞぬれつゝぞ、あとも思はぬきみにより、かひなき戀になにしかも、われのみ獨うきふねの、焦れてよにはわたるらむ、とさへぞはてはかやり火の、くゆる心もつきぬべく、思ひなるまでおとづれず、覺束なくてかへれども、けふ水莖のあとみれば、契りしことはきみもまた、忘れざりけり暫しあらば、誰もうきよのあさつゆに、光待つまの身にしあれば思はじいかでとこなつの、

花のうつろふあきもなく、同じわたりにすみの江の、岸のひめまつねをむすび、世々をへつゝもしもゆきの、ふるにもぬれぬなかとなりなむ

よみ人しらず

住吉のきしもせさらむものゆゑに妬くや人に待つといはれむ

（ある人のいはく住吉の明神の託宣とぞ）

住吉にまうでて　　安法法師

あまくだるあら人がみのあひおひを思へばひさし住吉の松

惠慶法師

われとはゞ神代のことも答へなむ昔をしれるすみよしの松

題しらず　　よみ人しらず

逢ふことをまつにて年のへぬるかな身は住の江に生ひぬ物ゆゑ

しのびつゝ思へばくるし住の江の松のねながら顯はれなばや

忠房がむすめのもとに久しうまからで遣しける　　大納言きよかげ

住吉の松ならねども久しくも君とねぬ夜のなりにけるかな

よみ人しらず

返し

久しくも思ほえねども住吉の松やふたゝびおひかはるらむ

人麻呂

住吉の岸を田にほりまきし稻のかる程までも逢はぬ君かな

よみ人しらず

題しらず

住吉のあら人神にちかひてもわするゝ君がこゝろとぞきく

住吉の岸におひたる忘草みずやあらましこひはしぬとも

人麻呂

住の江の岸にむかへる淡路島あはれと君をいはぬ日ぞなき

躬恒

右大將定國の家の屏風に

住の江の松を秋風吹くからに聲打ちそふるおきつしらなみ

（以上拾遺集）

民部卿泰憲近江守に侍りける時、三井寺にて歌合し侍りけるに、藤の花をよみ侍りける

よみ人しらず

すみの江の松のみどりも紫の色にぞかくる岸のふぢなみ

清原元輔

人の裳着侍りけるによめる

住吉の浦の玉もをむすびあげてなぎさの松のかげをこそみめ

大江匡衡朝臣

津の國にあからさまにまかりて京なる女につかはしける

こひしきに難波のことも思ほえずたれ住吉の松といひけむ

津守國基

賀茂の神主成助が許にまかりて、酒などたうべて、今まで冠給はらざりけることを嘆きてよみ侍りける

もみぢするかつらのなかに住吉の松のみひとりみどりなるかな

後三條院御製

延久五年三月住吉にまゐらせ給ひてかへさによませたまひける

住吉の神はあはれと思ふらむむなしき舟をさしてきたれば

民部卿經信

沖つ風ふきにけらしな住吉の松のしづえをあらふしらなみ

花山院の御ともに熊野へまゐり侍りけるみちに、住吉にてよみ侍りける

住吉の浦風いたくふきぬらしきしうつ波のこゑしきりなり　恵慶法師

右大將濟時住吉にまうで侍りけるともにてよみ侍りける

松みればたちうきものを住の江のいかなる浪かしづ心なき　藤原爲長

住吉にまゐりてよみ侍りける

忘れ草つみてかへらむ住吉のきしかたの世は思ひてもなし　平棟仲

藏人にて侍りける時御まつりのつかひにて難波にまかりてよみ侍りける

思ふこと神はしるらむ住吉のきしのしら波たか世なりとも　源頼實

熊野へまうで侍りけるに住吉にて經供養すとてよみ侍りける

ときかけつ衣の花は住吉の神さびにけるまつのこずゑに　增基法師

擧周和泉の任はてゝまかり登るまゝに、いと重く煩ひ侍りけるを、住吉のたゝりなどいふ人侍りければ、みてぐら奉り侍りけるにかきつけける

頼みては久しくなりぬ住吉のまつこのたびのしるしみせなむ　赤染衛門

上東門院住吉にまゐらせ給ひて秋の末より冬になりて歸らせ給ひけるによみ侍りける

都出でて秋より冬になりぬれば久しき旅のこゝちこそすれ　上東門院新宰相

住吉に參りて歸りにけるに、隆經の朝臣難波といふ所に侍ると聞きてまかりよりて日頃遊びてまかり上りけるに、名殘戀しきよしいひおこせて侍りければ道よりつかはしける

わかれ行く舟は綱手に任すれど心はきみがかたにこそひけ　藤原孝善

すみよしの宮うつりの日、かきつけ侍りける

住吉の松さへかはるものならばなにか昔のしるしならまし　山口重如

住吉にまゐりてよみ侍りける

住吉の松の下枝に神さびてみどりに見ゆるあけの玉がき　蓮仲法師

（以上後拾遺集）

百首の歌の中に藤花をよめる

住吉の松にかゝれる藤の花かぜのたよりになみやをるらむ　修理大夫顯季

祝の心をよめる

君が代のほどをばしらで住吉の松をひさしと思ひけるかな　大納言經信

一品宮天王寺にまゐらせ給ひて、日頃御念佛せさせ給ひけるに、御ともの人々住吉にまゐりて歌よみけるによめる

いくかへり花咲きぬらむ住吉の松も神代のものとこそきけ　源俊頼朝臣

鵜の水にうかべるをみて

あらふとみれで黒きとりかな　頼算法師

さもこそは住の江ならめよとゝもに　よみ人しらず

（以上金葉集）

一條左大臣の家に障子にすみよしのかたかきたる所によめる

過ぎ來にしほどをば捨てつ今年より千代は數へむ住吉の松　大中臣能宣朝臣

後三條院の住吉まうでによめる

君が代のひさしかるべきためしにや神も植ゑけむ住吉の松　大納言經信

としつなにぐして住吉にまうでてよめる

住吉のあら人神のひさしさに松もいくたび生ひかはるらむ　津守國基

大納言經信太宰帥にて下りけるに、川尻にまかりあひてよめる

六年にて君は來まさむ住吉のまつべき身こそ痛く老いぬれ　さがみ

題しらず

住吉の細江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらじな　みよ人しらず

長元八年宇治前太政大臣の家に歌合しけるに、かちがたのをの子ども住吉にまうでて歌よみ侍りけるによめる

住吉のなみにひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける　式部大輔資業

白河院位におはしましける時、修理大夫顯季につけて申さする事侍りけるを、宣旨のおそく下りければ、その冬ごろいひ遣はしける

津守國基

雲の上は月こそさやにさゐ渡れまたとゞこほるものやなになる

修理太夫顯季

とゞこほることはなけれど住吉のまつ心にや久しかるらむ

左衛門督家成歌合し侍りけるによめる

藤原範綱

住吉のあさ澤小野の忘水たゐ〳〵ならであふよしもがな

（以上詞花集）

大隅の任はて〻上らむとしけるを、大貳さたすることまだしとて、留めければよめる

津守有基

住の江のまつらむとのみ歎きつゝ心づくしに年をふるかな

住吉の社の歌合とて人々よみ侍りける時、旅宿時雨といへる心をよみ侍りける

右近大將實房

風の音にわきぞかねまし松が根の枕にもらぬ時雨なりせば

津守國基身まかりて後、住吉にも住まずなりにけるを、有基にぐしてあからさまに下りて侍りけるに、人の心もかはりて見え侍りければ、松のもとをけづりてかきつけ侍りける

津守景基

人心あらずなれども住吉の松のけしきはかはらざりけり

堀川院の御時百首の歌奉りける時、述懐の歌とてよみたてまつりける

源俊頼朝臣

もがみがは瀨々の岩かどわきかへり、思ふこゝろはおほかれど、行くかたもなくせかれつゝ、底のもくづとなることは藻にすむ虫のわれからと、思ひしらすはなけれども、いはではえこそなぎさなる、かたわれ舟のうづもれて、ひく人もなきなげきすと、涙のたちゐにあふげども、むなしき空はみどりにて、いふこともなきかなしさに、音をのみなけばかからごろも抑ふるそでもくちはてぬ、なにごとにかはあはれとも、思はむ人にあふみなる、打出の濱のうちいでて、いふとも誰かさゝがにの、いかさまにてもかきつかむ、ことを軒端にふくかぜの、はげしき頃としりながら、うはの空にもをしふべき、あづさの杣にみや木ひき、御垣がはらにせりつみし、昔をよそにききしかど、我が身の上になりはてぬ、さすがに御代のはじめより、雲のうへにはかよへども、なにはのこともひさかたの、月のかつらしをられねば、う

けらが花のさきながら、開けぬことのいぶせさに、よもの山邊にあくがれて、このもかのもにたちまじり、うつふし染のあさごろも、花のたもとにぬきかへて、後の世をだにと思へども、思ふひとゞ〳〵ほだしにて、ゆくべき方もまどはれぬかゝる憂き身のつれもなく、經にける年をかぞふれば、いつつの十になりにけり、いまゆく末はいなづまの、光の間にもさだめなし、たとへば獨りながらへて、過ぎにし許りすぐすとも、夢にゆめ見るこゝちして、ひまゆく駒にことならじ、更にもいはじふゆがれの、尾花がすゑのつゆなれば、嵐をだにもまたずして、本のしづくとなりはてむ、程をばいつと知りてかは、暮にとだにもしづむべき、かくのみ常にあらそひて、なほふる里にすみの江の、汐にたゞよふうつせがひ、うつし心もうせはてゝ、あるにもあらぬ世のなかに、また何ごとをみくま野の、うら濱木綿かさねつゝ、憂に堪へたるためしには、なる尾の松のつれ〴〵と、いたづら事をかきつめて、哀れしられむゆくすゑの、人のためにはおのづから、忍ばれぬべき身なれど

も、はかなきこともくもとりの、あやにかなはぬくせなれば、これもさこそは實なしぐり、くち葉が下にうづもれめ、それにつけても津の國の、生田の森のいくたびか、海士のたくなわくりかへし、心にそはぬ身をうらむらむ。

おなじ百首の歌奉りける時の長歌　　待賢門院堀川

ときしらぬ、谷のうもれ木くちはてゝ、むかしの春のこひしさに、何のあやめもわかずみの、變らぬつきのかげ見ても、時雨にぬるゝ袖のうらに、潮たれまさるあまごろも、哀をかけてとふひとも、波にたゞよふつりふねの、漕ぎ離れにし世なれども、君にこゝろをかけしより、繁きうれへもわすれぐさ、忘れがほにてすみの江の、松のちとせのはる〴〵と、こずゑはるかにさかゆべき、ときはの蔭をたのむにも、なぐさの濱のなぐさみて、布留の社のそのかみに、色ふかゝらでわすれにし、もみぢの下葉のこるやと、老曾のもりにたづぬれど、今はあらしにたぐひつゝ、霜かれ〴〵におとろへて、かき集めたるみづぐきに、淺きこゝろのかくれなく、流れての名ををしごりの、憂

きためしにやならむとすらむ。

長元八年關白左大臣歌合し侍りけるのち、左方の人よろこびに住吉に詣でて歌よみ侍りけるに、左の歌にてよみ侍りける　大納言經輔

住吉の浪も心をよせければうべぞみぎはにたちまさりける

中納言家成住吉にまうでて歌よみ侍りける時よめる　大納言隆季

神代より津守の浦に宮居して經ぬらむ年のかぎりしらずも

大納言辭し申して出で仕へず侍りける時、住吉の社の歌合とて人々よみけるに、述懷の歌とてよみ侍りける　右大臣

數ふれば八年へにけり哀れわが沈みしことは昨日と思ふに

（その後神慾あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍りけるとなむ）

おなじ歌合に　皇太后宮太夫俊成

いたづらにふりぬる身をも住吉の松はさりとも哀しるらむ

おなじ歌合に、社頭月といへる心をよみ侍りける　右大臣

ふりにける松ものいはずとひてまし昔もかくや住の江の月　俊惠法師

住吉の松の行きあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり

（以上千載集）

月前松風　寂蓮法師

つきはなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風ぞ吹く

七條の后の宮の五十賀の屏風に　伊勢

住の江の濱の眞砂をふむたづは久きあとをとむるなりけり

元喜四年、后の宮の歌合に、祝の心をよみ侍りける　前大納言隆國

住の江におひそふ松の枝ごとに君がちとせの數ぞこもれる

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

わが道をまもらば君をまもるらむよはひはゆづれ住吉の松

題しらず　藤原元眞

住吉のこひ忘れ草種たえてなき世にあへるわれぞかなしき

大貳三位さとにいで侍りけるを聞しめして　後冷泉院御製

まつ人はこゝろゆくとも住よしの里にとのみはおもはざらなむ

御返し　大貳三位

住吉の松はまつともおもほえで君がちとせのかげぞこひしき

住吉の歌合に、山を題しらず　太上天皇

奥山のおどろがしたも踏み分けて道ある世ぞとひとにしらせむ

源俊頼朝臣

數ならで世に住の江のみをつくしいつをまつともなき身なりけり

皇太后宮太夫俊成

うきながらひさしくぞ世をすぎにけるあはれやかけし住吉の松

御神詠

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行合のまより霜や置くらむ

（此歌は或人の住吉に詣でて「人ならばとはましものを住の江の松は幾度生ひ變るらむ」とよみて奉りける御返しなりとなむいへる）

いかばかり年はへぬとも住の江の松ぞ二度おひ變りける

（伊勢物語に住吉に行幸の時おほむ神けぎやうし給ひとしるせり）

むつまじと君はしらなみ瑞籬のひさしき世より祝初めてき

一品聰子内親王住吉にまうでて人々歌よみ侍りけるによめる　藤原通經

住吉のはま松が枝にかぜふけば波の白ゆふかけぬまぞなき

奉幣使に住吉に參りて、昔住みける泊の荒れたりけるをよみ侍りける　津守有基

住吉と思ひし宿は荒れにけり神のしるしをまつとせしまに

（以上新古今集）

守覺法親王の家に五十首の歌よみ侍りけるに春の歌　覺延法師

住吉の松のあらしもかすむなりとほさとをのゝ春のあけぼの

平忠度朝臣

頼めつゝ來ぬ夜つもりのうらみてもまつよりほかの慰ぞなき

戀の歌よみ侍りけるに　藤原爲忠朝臣

住吉の千木のかたそぎ我なれや逢はぬもの故年をへぬらむ

題しらず　よみ人しらず

いとまあらばひろひに行かむ住の江の岸によるてふ戀忘貝

和泉式部

住吉の有明の月をながむればとほざかりにしかげぞ戀しき

亭子院の御供に仕うまつりて住吉の濱にてよめる　一條右大臣

住吉の浦に吹きあぐるしら浪ぞゆふ滿つときの花と咲きける

（以上新勅撰集）

文治六年女御入内の屏風に　後德大寺左大臣

住吉の松のうれよりひゞき來て遠里小野にあきかぜぞ吹く

住吉の社にうたふべき求子の歌とて神主經國よませ侍りけるに　前中納言定家

住吉の松がね洗ふしきなみに祈るみかげは千世もかはらじ

同じ社に詣でてよみ侍りける　前太政大臣

松がねに涙こすうらの宮ごころいつ住吉とあとをたれけむ

本社にさぶらひてよみ侍りける　津守國平

我君をまつの千年と祈るかな世々につもりの神のみやつこ

後三條院住吉に御幸有りける日よみ侍りける　太宰權帥伊房

いにしへも今日のみゆきのためとてや天降りけむ住吉の神

太宰大貳實政

はるかなる君が御幸は住吉の松に花さくたびとこそみれ

題しらず　前大納言光賴

住吉の松のしづえは神さびてゆふしでかくるおきつ白浪

鎌倉右大臣

行く末も限りはしらず住吉の松のいくよのとしかへぬらむ

建保三年五首の歌合に、松經年　後鳥羽院御製

かたそぎの行きあひの霜のいくかへりちぎりかむすぶ住吉の松

後法性寺入道前關白の家の百首の歌に　宣秋門院丹後

神代よりうゑはじめけむ住吉の松は千歳やかぎらざるらむ

住吉に詣でてよめる　　權大僧都珍覺

跡たるゝ神や植ゑけむ住吉のまつのみどりはかはる世もなし

洞院攝政の家の百首の歌に、忍戀　　從三位行能

住吉のあさかの浦のみをつくしさてのみしたに朽やはてなむ

よみ人しらず

住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の浦より出づる舟びと

（以上續後撰集）

草の名に忘れやしぬるほとゝぎすさつきもとはぬ住吉の里

百首の歌の中に　　津守國平

今朝見れば雪も津守の浦なれや濱松が枝の波につくまで

名所擣衣といふことを　　慈鎮

眞萩ちる遠里小野の秋風に花すりごろもいまやうつらむ

　　中務卿親王

西の海やあをきが原のしほぢよりあらはれ出でし住吉の神

光俊朝臣よませ侍りける住吉の社の三十首に、神祇を　　卜部兼直

宮居せしとしもつもりの浦さびて神代おぼゆる松の風かな

家に百首の歌よませ侍りけるに　　後京極攝政前太政大臣

神垣に見そめし松も老いにけり思ひしらるゝ年のほどかな

住吉に詣でたりけるに、小松の侍りけるを又參りて見れば、老木になりにければよめる　　前中納言資長

みそぎせし末とだにみよ住吉の神もむかしを忘れはてずば

四條院の御時八十島の祭の使のこと承りて侍りけるに、事たがひてさも侍らざりければ、その後住吉に詣でて、我家に代々のこのつかひつとめ侍りける事など思ひつゞけて、よみ侍りける　　兵部卿隆親

住吉の神の三室のゆふだすき心にものゝかゝらずもがな

住吉に奉りける歌に、神祇をよめる　　中納言

住吉の岸のみづがき神さびてその世もしらぬ松のいろかな

建保三年六月二日和歌所の歌合に、松經年　　衣笠前内大臣

建長五年住の江に遊覽の日　前太政大臣

けふやまたさらにちとせを契るらむ昔にかへる住吉のまつ

住吉の社の遷宮の後、熊野に詣でて侍りしついでにかの社によみ奉りし歌　太上天皇

神よ神なほすみよしと見そなはせわが世にたつる宮柱なり

熊野に詣で侍りしついで住吉にて、浦の松を　太上天皇

みつ汐も岸べはるかになりはてゝ今はうらなる住吉のまつ

住吉に詣でてよめる　藤原基隆

住吉とたがいひおきし浦ならむさびしかりける松の風かな

住吉の社の歌合に　從三位頼政

いたづらに年も津守の浦に生ふる松ぞわが身のたぐひなりける

内大臣に侍りける時の百首に、名所戀を　光明峰寺入道前攝政左大臣

住吉の千木の片そぎ年をへてまだ行きあひも知らぬ戀かな

後法性寺入道前關白の家の百首の歌に　俊惠法師

君が代は津守の浦に天くだる神も千歳をまつとこそきけ

前大納言爲家住吉の社にて歌合し侍りけるに、野花　藤原仲敏

かへるさは遠里小野の櫻がり花やこよひの山ざくらかな

寶治百首の歌奉りける時、夕立　前内大臣

淡路島夕立すらしすみよしの浦のむかひにかゝるむら雲

藤花年久といへる心を　澄覺法親王

住吉の松のしづえの藤のはないくとし波をかけて咲くらむ

戀の心を　中原行範

恨みてもいくよになりぬ住吉の松はつれなき色に戀ひつゝ

社頭花といへる心を　後德大寺左大臣

住吉の濱まつが枝の絶間よりほのかにみゆる花のゆふしで

家の百首の歌の中に、神祇　後法性寺入道前關白太政大臣

なみたてばしらゆふかゝるすみ吉の松こそ神の榊なりけれ

住吉にまうでてよめる　西行法師

（以上續古今集）

住吉の松がねあらふ波のおとをこずえにかくるおきつしほ風

弘長三年内裏にて名所松と云ふことを人々つかうまつりけるに　前大納言良教

住吉のきしかたとほき松が根に神代をかけて寄する白なみ

御巻數を松の枝につけて大宮院に奉りけるに、女房にかはりて常磐井入道前太政大臣歌をつかはしたりけるをみて、後によみてさしおかせ侍りける　津守國平

住吉の松に結びしことのはにいのるちとせを神やうけゝむ

上東門院住吉の社にまゐらせ給ひける御ともにてよみ侍りける　權大納言長家

住吉の岸にこゝろをとめつればちとせをそふる御幸なるべし

秋の歌の中　津守國平

ころもうつ音ぞ夜ふかくきこゆなる遠里小野の風のたよりに

（以上續拾遺集）

千五百番歌合に　從二位家隆

住の江の月に神代のことへばまつの梢にあきかぜぞふく

後法性寺入道前關白、右大臣に侍りける時、家に百首の歌よみ侍りけるによみて遣しける　後德大寺左大臣

住吉の松の岩根をまくらにてしきつの浦のつきを見るかな

神祇の心を　中務卿宗尊親王

住吉のうらわの松のわかみどりひさしかれとや神もうゑけむ

從二位行家、住吉の社にて歌合し侍りけるに　前右兵衛督爲教

神がきや松の緑にかけ添へてたのむにさける花のしらゆふ

久安の百首の歌に　皇太后宮太夫俊成

いくかへり波の白ゆふかけつらむ神さびにけり住吉のまつ

題しらず　前大納言經任

住吉の浦の松が枝としを經て神さびまさるかぜの音かな

前大納言爲氏、住吉の社にて歌合し侍りける時、社頭松を　法眼廣融

代々絶えぬ道につけても住吉の松をぞ仰ぐたのむかげとは

住吉の社によみて奉りける百首の歌の中に　皇太后宮太夫俊成

和歌の浦のみちをばすてぬ神なればあはれをかけよ住吉の浪

戀の歌の中に　小侍從

住吉の神に祈りしあふことの松もひさしくなりにけるかな

題しらず　權中納言經平

住吉の岸のあだ浪かけてだに忘るゝくさはありとしらすな

住の江にてよめる　如顯法師

住吉の松ふく風もかはらねば岸うつ浪やむかしなるらむ

堀河院に百首の歌奉りし時　權中納言國信

あらしふく伊駒の山の雲はれてながゐの浦にすめるつきかげ

（以上新後撰集）

寄松祝と云ふことを　平時廣

行く末のひさしき御代にくらぶればむかしはちかし住吉の松

住吉に始めて詣で侍るとて　祭主輔親

まだしらぬ難波の浦の芦間わけこぎ行くかたや住吉のうら

嘉元の百首の歌奉りけるに、松　左近中將爲藤

住吉の松の思はむことの葉をわが身にはつるしきしまのみち

龜山院住の江に御幸侍りて、人々に歌よませさせ給うけるに　入道前太政大臣

めづらしきみゆきにゆづれ住吉の神のまゝなる松のちとせを

後法性寺入道前關白右大臣に侍りける時、家に百首の歌よませ侍りけるに　皇太后宮太夫俊成

しきなみに頼みをかけし住吉の松もやいまは思ひすつらむ

（以上玉葉集）

住吉の社によみて奉りける百首の歌の中に、若菜を

下もねやまづいそぐらむ白雪の淺澤小野にわかなつむなり　式乾門院御匣

弘安の百首の歌奉りける時

住の江のまつはひさしきほとゝぎす遠里小野にひと聲もがな

從二位行家人々にすゝめ侍りける時、住吉の社の十首歌合に、江上月、　前大納言爲氏

住の江の松の秋風おとづれてそらにふけ行く夜半の月かげ

寛元元年長月の頃住の江にまかりて翫二明月一といふ事をよみ侍りける　西園寺入道前太政大臣

住吉の松もわが身もふりにけりあはれとおもへ秋の夜の月

建長五年、住の江に御幸侍りて、行旅述懷と云ふ事を講ぜられ侍りけるに詠ませ給ひける　後嵯峨院御製

跡垂れし神世に植ゑば住吉の松も千年を過ぎにけらしも

幾千世とまた行くすゑを契るらむ今日待ちえたる住吉の松　太宰權帥爲經

住の江や今日のみゆきを待つとてぞ神も千年の種は蒔きけむ

弘安八年住の江に御幸侍りて、同じ心を講ぜられ侍りけるに　前右兵衛督爲教

住吉の松の千年もみゆきする今日のためとや神も植ゑけむ　山本入道前太政大臣

住吉の神主國平、大宮院に御卷數奉るとて松の枝につけ侍りけるを見て女房に代りて　常磐井入道前太政大臣

千年ともいのるしるしの言の葉をむすびやつくる住吉の松

住吉の社を繪にあらはして、神祇祝と云へる心を人々詠み侍りける時　權中納言爲藤

住吉の松も花咲く御代に逢ひてとかへりまもれしきしまの道

本社にさぶらひて雨を祈るとて詠める　津守經國

さらぬだに淺澤小野の忘水忘れはてゝもいくか經ぬらむ

江上月を　皇太后宮太夫俊成

思ひ出でよ神代も見きやあまのはら空もひとつに住の江の月

住吉の浪うつきしの草なれや人めわすれてぬるるたもとは　源兼氏朝臣

久安百首の歌に　皇太后宮太夫俊成

わすれ草つみにこしかど住吉のきしにしもこそ袖はぬれけれ

戀の歌の中に　典侍親子朝臣

いかにせむ身を住の江の草の名におもひなしてや訪ふ人のなき

寶治の百首の歌奉りける時、岸菖　太宰權帥爲理

住吉のきしの岩根にむす苔のみどりに松のいろやそふらむ

（以上續千載集）

住吉の淺澤小野のかきつばたきぬに摺りつけ着む日知らずも

よみ人しらず

住吉の社にてよみ奉りける百首の歌の中に、藤

たちかへり誰か見ざらむ住吉の松にはな咲くはるの藤なみ

前大納言爲家

郭公を詠める　平忠度朝臣

住吉のまつとしらずやほとゝぎすときはの森の松はふりにき

女御徽子女王

忘草おふとしきけば住の江のまつもかひなく思ほゆるかな

四條太皇太后宮、住吉の社にまうで給ひける時よみ侍りける　康資王母

住吉の松と開きてはとしふれどかゝる常盤のいろをこそみね

上東門院おなじ社にまゐらせ給ひけるに、左衛門督にて侍りける時まゐりてよみ侍りける　土御門右大臣

住吉の岸のひめ松いろにいでて君が千年とみゆるけふかな

保元二年十一月八十島にまゐりけるに、住吉の社にてよみ侍りける　前大納言經房

君が代のしるしとぞみる住吉の松吹くかぜものどけかりけり

藤原範永朝臣攝津守になりて、住吉の社に始めて臨時の祭おこなひ侍りける時、松のもとにてもの申しけるついでによみ侍りける　津守國基

わが身こそ神さびまされ住吉のこだかき松のかげにかくれて

住吉にまうでてよみ侍りける　道濟

宮はしらふとしき立てゝ我が國に幾代へぬらむ住吉のかみ

題しらず　平時香

住吉の岸なるくさはしげるとも神よむかしのあとをわするな

津守國道

守るなる神につけても住の江の波にはみちを思ひやはせむ

（以上續後拾遺集）

九月十三夜、住吉の社にて詠み侍りける　前參議俊言

住吉のかみのおまへの濱きよみこと浦よりも月やさやけき

安倍宗長朝臣

松かげの水堰き入れて住吉の岸のうへ田にさなへとるなり

從三位行尹

漕ぎ出でて武庫の浦よりみわたせば波間にうかぶ住吉の松

雜の歌に　前大納言爲兼

あふぎても頼みぞなるゝいにしへの風をのこせる住吉のまつ

津守國夏

わが君をまもらぬ神しなけれどもちよのためしは住吉の松

（以上風雅集）

津守國助

住吉のあさゞは水にかげ見ればそら行く月も草がくれつゝ

人麻呂

住よしの遠里小野の眞萩もて摺れるころものさかり過ぎ行く

弘安八年住江に御幸ありて行旅述懷と云ふことを講ぜられ侍りけるに、つかうまつりける　前大納言爲兼

ふりにけるあとをたづねて住吉の御幸重なる今日にもあるかな　津守國冬

嘉元の百首の歌奉りける時、曉

神がきにわれこそいそげ榊葉の木綿つけ鳥のこゑを待ちえて　津守國夏

元享四年後宇多院に召されける住吉の社の三首の歌合に、神祇

おこたらず祈るも御代のためなれば君と神とに身はつかへつゝ　津守國平

社務の後二たび遷宮にあひぬる事を思ひて

つかへてもひさしくなりぬ瑞垣のふたたび變る御代に逢ひつゝ　權中納言爲明

前大納言爲世人々にすゝめて住吉の社にて歌合し侍りけるに神祇を

世と共にさかゆべしとや瑞垣にいはひそめけむしきしまの道　藤原長秀

等持院贈左大臣の家にてよみ侍りける歌の中に、同じ心を

住吉の松の言の葉かはらずば神代にかへれしきしまのみち　津守國夏

題しらず

神垣やぬさとくだけて降る雪のつもれば松にかへるしら木綿　よみ人しらず

すみ吉の岸にはあらで忘草いつより人のうきにおふらむ　前中納言爲相

高祖父秀能住江の釣殿に書き付け侍りける歌につきて、夢想の事ありければ、住吉の社に詣でて侍りけるついでに、かの柱にかきそへ侍りける

かれねたゞよし住の江の岸もせぬつらさばかりの草の名もうし　藤原秀經

たち歸りまつもかひあれ住吉のきしかたしたふあとの白浪　嘉陽門院越前

（以上新千載集）

五十首の歌合に

春くれば岸うつ波はのどかにてかすみかゝれる住吉の松　法成寺入道前攝政太政大臣

長元四年九月、上東門院住吉の社に詣でさせたまひける時、人々歌詠み侍りけるに

君が代は長柄の橋のはじめより神さびにける住吉のまつ　西園寺入道前太政大臣

建久二年八十島の祭に住吉にまかりて詠み侍りける

君が代は八十島かくる波のおとに風靜かなり住の江のまつ

弘安八年住吉に御幸ありて行旅述懷といふ事を詠ませられ侍りけるに、仕うまつりける　津守國助

神代より相生の松もけふしこそありて千年のかひも知るらめ

清愼公隱れて後、かのつくりて置きて侍りける住の江のかたを見て、詠み侍りける　康義公

ながき世のためしと聞きし住の江の松の烟となるぞ悲しき

百首の御歌の中に　土御門院御製

行き逢はむほどをば知らず住吉の松の絶間のちぎの片そぎ

住吉にまうでて詠める　伊勢大輔

ながらへむ世にもわすれじ住吉の岸に浪たつまつの秋かぜ

後白河院の御時、八十島の祭に、住吉にまかりて詠み侍りける　權大納言隆季

住の江に八十島かけてくる人や松を常盤のともと見るらむ

西行法師すゝめ侍りける百首の歌に　前中納言定家

憂きことも慰む道のしるべにや世を住吉とあまくだりけむ

題しらず　平政村朝臣

住吉の松にまじれる玉垣のあけもみどりもとしは經にけり

西園寺入道前太政大臣住吉の社に、三十首の歌詠みて奉りける　前大納言爲家

いく世にか神の宮居のなりぬらむふりてひさしき住吉の松

神祇　前中納言爲相

あらましの心のうちのたむけぐさまつと知らずや住吉の神

法印雲禪

しきしまのみちをば道とまもらなむ世に住吉の神ならばかみ

住吉の社の歌合、社頭祝　津守國平

君がため玉手のきしにやはらぐる光の末は千世もくもらじ

忠見津の國に年頃身を沈めて侍りけるに、おほやけ聞こして召し侍りければ、よる參りて侍りける、つとめて、ありしとの朝臣して仰せられける　天曆御製

見しかども誰とも知らず難波潟波のよるにて歸りにしかば

御返し　忠見

住吉の松とほのかにききしかば滿ちにし汐のよる歸りけむ

天德四年內裏の歌合に詠める　　平　兼盛

（以上新拾遺集）

我が行きていろ見るばかり住吉の岸の藤波折りなつくしそ

名所の百首の歌奉りける時　　前大納言爲氏

淡路島むかひの雲のむらしぐれそめもおよばぬすみよしの松

堀川院に百首の歌奉りけるに、霜　　俊頼朝臣

住吉の千木の片そぎ行きも逢はで霜置き迷ふ冬は來にけり

松にのみおとはひゞきて住吉の岸田の穗なみあき風ぞ吹く

帥になりて下りけるに、別れ惜むとて津守國基が「六とせにぞ君はきまさむ」と云へりける返しごとに　　前中納言公勝

とゞまるも過ぎ行く身をも住吉の松のよはひと祈らざらめや

大納言經信

百首の歌奉りける時、忘戀

忘草生ふと聞くより住吉のきしはよそなるなかのかよひ路

源義將朝臣

永仁六年十月、龜山院住吉の社に御幸の時、遠島眺望と云ふことをつかうまつりける　　津守國冬

朝ゆふに見ればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島やま

たちばなの小戸の汐瀨にあらはれてむかし語りし神ぞこの神

題しらず　　津守國量

住吉の松のむらだちいくかへりなみにむかしの花咲きぬらむ

藤原敏行朝臣

（以上新後拾遺集）

住吉の社に奉りける卅首の歌に、山花を

吉野やまたきの白糸くりかへし見てしもあかぬ花の色かな

儀同三司

住吉の社に詠みて奉りける歌の中に

花ざかりこずえにかゝる白雲のうつろふかたやみよし野の山

久世入道前太政大臣

住吉の社に詠みて奉りし歌に、落花

源經氏

かざせどもかくれぬ老に今はたゞ散りかひ曇る花を頼まむ

住吉の社に奉りける歌の中に　大納言重光

咲きかゝる松は殘らず埋もれておのれ木高き春のふぢなみ

同じ心を　式乾門院御匣

行く春の忘れがたみは住の江の岸の藤波いまや咲くらむ

題しらず　前大僧正禪守

これもまた神やうゐけむ住吉の松にかゝれる岸のふぢ波

住吉の社に奉りける歌の中に、卯花を　後香園院入道關白前左大臣

つぎて降る雪かとぞ見る山櫻散りのまがひに咲ける卯の花

住吉の社に奉りける歌の中に　源頼元朝臣

ほととぎす待つ宵すぎてつれなくばあくる雲居に一聲もかな

住吉の社に詠みて奉りし歌の中に、水邊螢を　藤原雅親

池水のいひ出でがたき思ひとや身をのみこがす螢なるらむ

同じ時に　四辻入道前左大臣

神垣の月ぞすゞしき夏と秋ゆきあひの間の霜とけるまで

同じ時に　源詮信

秋風に荻の葉そよぐ枕よりあとなきものはうたゝねの夢

同じ時に　前大納言仲光

それとなき哀を夜の心とはたがならはしのゆふべなるらむ

住吉の社に詠みて奉りける歌の中に、海月を　源義種

沖つ浪いくあきかけて住吉の松のこづゑにつきをよすらむ

百首の歌奉りし時、浦月　左大臣

月かげの雪もつもりの浦風になほあきさむしすみよしの松

よみ人しらず

住吉の遠里小野のはな薄ほのかにきつゝさをしかのこゑ

延喜十三年、菊合に　阪上是則

波とのみ打ちこそ見ゆれ住の江の峯にのこれる白菊のはな

住吉の社に奉りける歌の中に

みなの河峯より落つるもみぢ葉も積りて浪をまたや染むらむ　正三位義重

同　じ　時

紀の海や沖つ浪間の雲はれて雪にのこれる浦のはつしま　後德大寺左大臣

後法性寺入道前關白太政大臣の家の百首の歌に、祝の心を

住吉のまつは昔の二葉より久しきことのためしにぞひく

太宰大貳國章が、子うませて侍りける五十日に遣しける破子の繪に、かゝせ侍りける歌

住の江に濱の眞砂の苔ふりていはほとならむほどをこそ思へ　清原元輔

題しらず

君が代にかねて植ゑける住吉の松吹く風はすゑもはるけし　前大僧正慈鎭

堀川院の御時、百首の歌奉りけるに、祝の心を

松かげに宮つくりせる住吉のひさしき世をば君ぞ見るべき　中納言國信

住吉の社にまうでて詠み侍りける　祝部成仲

住吉と聞くに心はとゞまるをいかなる波の立ちかへるらむ　澄覺法親王

住吉の松は祈るもかひなきによしさは茂れこひわすれ草　四辻入道前左大臣

住吉の社に詠みて奉りける歌の中に

住吉の沖のしほあひは見わわかで霞にうかぶ淡路しまやま　寶密法師

秋風の松吹くおとにうらさびて神もこゝろやすみのわのつき　正三位兼熙

住吉の社に奉りける歌の中に

橋姫のかたしき衣たちこめて待つ夜をたどる宇治の河ぎり　よみ人しらず

住吉の社に詣でて寒夜千鳥といふことをよめる

沖つ風ふけてはいとゞ月影もさむき汐干に千鳥なくなり　式部卿邦省親王家少將

三十首の歌よみ侍りける中に、松を

住吉の松のこづ枝のおきつ波かくる心をあはれとはしれ

住吉の社の歌合に、山を　　如願法師

足引の山のふる道あと絶ゑて尾の上のかねに月ぞのこれる

住吉の社に奉りける歌に、述懐を　　前大僧正尊玄

幾世しもあらじ今はと思はずばなににか老の憂きを忍ばむ

住吉の社に奉りける歌の中に　　四辻入道前左大臣

敷島や山より高くなるまでになほみちしらぬ身を歎きつゝ

同　じ　時　　後香園院入道關白前左大臣

むかし思ふ涙の玉のおのづから年月ながきほどぞ知らるゝ

同　じ　時　　源　詮　信

忍ぶべきむかしも身にはなきものを何を忘れぬ涙なるらむ

同　じ　時　　入道一品親王尊道

山寺のいりあひよりも老らくのねざめかなしき鐘の音かな

源通清熊野より歸りまうでくと聞きて、よき墨や侍ると尋ねけるに、あしきよし申したりければ　　藤原朝家

住吉と今はたのまじ津の國のなにはたがへるところなりけり

御神詠　　龜山院御製

ころもだに二つありせばあかはたの山の一つはかさましものを

（この歌は住吉の御歌となむ申し傳へたる）

弘安八年十月住の江に御幸ありて、行旅述懐といふ事をよませ給うける

住吉の松はためしも知るらめやふたよのあとにかへる浦波　　前大納言爲世

君がためみどりかはらず年ふりて三代に逢ひぬる住吉の松

題しらず　　土御門入道前内大臣

幾年もつもりの浦の松が枝に神代ひさしき風のあとかな　　等持院贈左大臣

あゆみをばはこばずとてもこの道をまなばじまもれ住吉の神

住吉の社に奉りける歌の中に　　成恩寺關白前左大臣

さりともと祈りしことも住吉のまつほどひさになりにけるかな

山里の障子の繪に住吉のかた書きたる所　俊朝朝臣

住の江に神さびにける松なれば涙もしづゐにゆふかけて見ゆ

寄江述懷と云ふ事を　津守國道

世々かけて深くぞ頼む住の江のえにしありける神につかへて

百首の歌奉りし時、神祇　雅永朝臣

わたつ海をあらはれ出でしちかひまで深くぞたのむ住吉の神

（以上新續古今集）

中務卿宗良親王人々にすゝめて、詠ませ傳りし住吉の社の三百六十番の歌合に、春動物　權大納言顯經

さすがまた花に越路や忘るらむ歸りもやらぬ春のかりがね

同じ時　よみ人しらず

山櫻ちるまで見てば家つとに祈るべき枝の花やなからむ

彌生の末つかた妙光寺内大臣信賢卿など伴ひて、住の江の藤見侍りける折りしも、かしこにまかりあひて侍りけるに、歸りて後申しつかはしける　前大僧正頼意

住の江の松もさかゆく色見ゐて連なる枝にかゝる藤なみ

住吉の社の三百六十番の歌合に、夏動物　よみ人しらず

鳥の音のなべて聞えぬ山にしもなれはなきける郭公かな

同じ時　夏雜物

たがみそぎゆふ涙かけて河の瀨の麻の葉ながし風ぞすゞしき

正平十八年、内裏にて人々題を探りて百首の歌よみ侍りける時初秋の心を　福恩寺前關白内大臣

住吉の松に涼しくきゝそめつ秋くるかたのおきつしほかぜ

從三位國量

住吉のおきを深めて立つ霧にしづみいでぬるあはぢ島山

住吉社の三百六十番の歌合に、秋植物を　よみ人しらず

桐の葉もたゞやは落つるわが涙おなじくさそへ秋の夕かぜ

中務卿宗良親王あづまに侍りし頃、住吉の行宮よりたまはせ侍りし　後村上院御製

としを經るひなのすまひの秋はあれど月は都と思ひやらなむ

御返し

いかにせむ月はみやこと光りそふ君住の江のあきのゆかしさ　中務卿宗良親王

正平十六年九月十三日夜、内裏にてひとぐ題を探りて歌よみ侍りける時、江上月を

またや見む松ふく風もすみの江や名高き月の秋のこよひを　冷泉入道前右大臣

住吉社の三百六十番の歌合に

葛城やたかまの月のかげふけて雲ぞよそなる峯のあき風　前左近衛中將光實

同じ時

山ふかみ月もやどりをかるもかく臥猪の床のつゆのした草　よみ人しらず

同じ時　秋雜物

ぬし知らぬいせをの蜑のあて衣秋なりけりと涙やうつらむ　土御門入道前右大臣

同じ時　冬天象

かねてきく日數ならずば定めなき時雨を冬とたのまざらまし　權大納言顯經

同じ時　同じ題

吹き迷ふ嵐にさわぐ浮雲のはやひとかたはしぐれてぞゆく　よみ人しらず

同じ時　同じ題

神無月われは思ひの外にふる時雨はなべてこのごろのそら　左近衛大將公長

同じ時　冬動物

沖つ波高師の濱のはま風に夜やさむからし千鳥なくなり　二品法親王深勝

同じ時　冬地儀をよみ侍りける

山川はちるもみぢばにせかれてや淀むかたよりかつこほるらむ　よみ人しらず

同じ時　冬植物

冬草の己がさまぐなほ見ねてつもらぬほどの雪ぞさびしき　後村上院御製

住吉の行宮におましましける頃、うへのをのこども題を探りて、歌つかうまつりけるついでに、松雪といふ事をよませ給ひける

としさむきためしは誰もならふらむ松につもりの浦の白雪　中務卿宗良親王

住吉社の三百六十番の歌合に

ふる雪のつもるにぞしる浮島の浜にも松のぬれぬものとは

正平十五年十月住吉の社に行幸ありて神主國量正下の四位に叙せられける時、お
ほしめしつゞけさせ給ひける　後村上院御製

位山こゑてもさらに思ひしれ神も光をそふる世ぞとは

從二位衡立願の事ありて、同じき社のかむだちにて、箏の秘曲を手向け侍りける
時、忍びてまうで給ひけるをりしも、松風すごくひゞきあひて、月雪の光さへた
ぐひなく侍りければ、思ひつゞけさせ給ひける　新宣陽門院

忘れじよ忘るな神も月雪のよはに手向くる松かぜのこゑ

後醍醐天皇の大納言典侍さまかへて後、住吉の西林院といふ所に住み侍りける時、
彼の寺の梅の花をめされけに奉りければ　後村上院御製

わがたのむ西の林の梅の花みのりの花のたねかとぞみる

御返し　後醍醐天皇大納言典侍

たのみける君がめぐみの色そへて御法の花はなほぞさかゑむ

題しらず　よみ人しらず

わが心つたの細江をこぐ舟の君にぞよせし浦がくれても

住吉社の三百六十番の歌合に、戀地儀　右近衛大將長親

思ひいる心ひとつに迷ふかな野にも山にもあらぬ戀路を

同じ時、同じ題にて　中務卿宗良親王

身にあまる煙ばかりと思ふなよなきてぞ富士のねにたてぬべき

同じ時、戀動物　中務卿宗良親王

夏かりの芦間にかよふあともうしむれゐる鳥のたつ名思へば

同じ時、戀植物　右近衛大將長親

よそながらきみとばかりをちぎりにてつひにつれなき武隈の松

戀の歌の中に　嘉喜門院大藏卿

住吉のきしかた遠くたのめきてまつもひさしきみのちぎりかな

住吉社の三百六十番の歌合に、戀天象　中務卿宗良親王

待ち見ては詠むるほどの隙もあらじ月ぞこぬ夜のすさびなりける

同じ時に、戀雜物　よみ人しらず

しきしのぶとふの菅薦ふみにだに君がこぬ夜はわれやねらるゝ

同じ時に

木にもあらず草にもあらぬ契だにうら枯れてゆく人の秋風

前大納言光任女

題しらず

かれはてし人には誰か住吉の岸なるくさの名ををしへけむ

春宮太夫師兼

住吉の社の三百六十番の歌合に

春もなほ朝風さむみうちまやま霞のころもかりぞなくなる

後村上院御製

住吉の社のかむだちに行幸ありて、浦のかた御覽ぜられけるに、松の姿などたぐひなかりければ、よませ給うける

言の葉もおよばぬ松の木蔭かなむべも心ある神やうゑけむ

前大納言光任

同じ時、人々題をさぐりて百首の歌つかうまつりける中に、名所松といふ事をよみ侍りける

ふりにたる姿とのみや住吉のおい木の松もわれをみるらむ

津守國久

題しらず

住の江の岸にふりぬる松見れば過ぎし昔も目にちかきかな

住吉の岸なる草にならはずは松も見し世や思ひいづらむ

權中納言經高

住吉の社の三百六十番の歌合に、雜地儀といふ事を人に代りてよめる

左近衛大將長親母

いそがれぬ五十路の坂も越にけり老は勿來の關守もがな

前大納言頼意

同じ時に

夕しほや磯山かけてみちぬらむ浪間に見ゆる松のむらだち

前中納言爲忠

題しらず

住吉のおまへの沖の潮あひにうかびいでたる淡路しまやま

土御門入道前右大臣

住吉の社の三百六十番の歌合に、雜地儀

松島やを島の浪にことはむ立ちかへるべき時もありやと

妙光寺内大臣

後村上院住吉の行宮におはしましけるとき、御遊などありて上達部殿上人におほみき給はせ侍りしに、新宣陽門院いまだ一品宮と申しけるが、櫻人の心ばへなど作りて出だされたりけるを、左大臣の許に遣はさるべきよし、さたありければ、まかでざまに女房の中へ申し侍りける

こと浦にその舟よする櫻人あかぬいろをばあすかへり見む

中務卿宗良親王人々に進めてよませ侍りし住吉の社の三百六十番の歌合に、雜儀をよめる　　權中納言實興

和歌の浦やかゝるしるべをまち得てもおよばぬ浦に濡る袖かな

同じ時、雜地儀を　　中務卿宗良親王

道しらぬは山しげ山障るともなほあらましの末はとほさむ

正平十九年三月住吉の社に行幸ありて、人々百首の歌仕うまつりけるに、老後懷舊といふ題をたまはりてよみて奉りける　　從三位俊文

老てこそ今思ひではある身なれさても昔のなどやこひしき

祝の歌とてよめる　　果尊法親王

誰れをかも君よりほかは住吉の松のよはひをしる人にせむ

正平十五年九月、かさねて住吉の社に行幸ありて、三首の歌講せられし時、社頭松を　　入道前關白左大臣

千代をまたかさねて契れ御幸してふたびなるゝ住吉のまつ

同じ行宮にて太宰帥親王うまれ給ひし頃、うへのをのこども、題をさぐりて歌仕うまつりけるに、鶴を　　權大納言公夏

住吉の松より巣立つ鶴の子の千年は今日や始めなるらむ

住吉の行宮におましましける頃、人々色々心ばへをつくして風流の破子ども奉りける中に、神主國量八十島のまつりのかたを作りて奉りけるを御覽じて　　後村上院御製

禊する八十島かけていましめや浪治まれる時はみゐける

この御製をうけたまはりて　　從三位國量

君が代のあり數なれや禊する八十島ひろきはまのまさごは

（以上新葉集）

興福寺大法師等

日本乃野馬臺能國遠賀美侶伎能宿那毗古那加葦菅遠殖生志津津國固米造介牟與理瀛津波起每年爾春有禮度今年之春波每物爾滋榮豆天地乃神毛悅比海山毛色聲變志梅柳常與理殊爾敷榮咲萬比開天鬻毛聲改豆八千種爾寄事波茜刺志天照國乃日宮能聖之御子曾瓠葛天能梯建踐歩美天降利坐志志大八洲天津日

嗣能高御座萬世鎭布五八能春爾有氣利我國之聖乃皇波尊毛御坐加日宮能聖之
御子能天下爾御坐天御世御世爾相承襲豆每皇爾現人神止成給御坐世波四方
之國隣皇波百嗣爾繼云止毛何豆加等久有牟所以爾神毛順比佛佐倍敬給布益益
爾今我帝波往古爾毛不御坐志將來毛何申牟釋迦之法弘米給豆出家之人法
乃族遠罪有度赦賜都咎有止宥米賜都無譬伎御惠乃異廣久御坐世波出家人法族
波御世世恒爾惜牟度年月迄堰加倍留天不過須豆鎭牟止許曾誓願比禱申勢然禮度毛
世之理度歡之春爾有介利何志豆帝之御世萬代爾重禰飾豆奉令榮度柘之枝乃由
求禮波佛許曾願成志多倍聖而己驗波伊萬世所以爾帝遠鎭布爾驗萬須陀羅尼乃御
法卌卷乎寫志繕倍護成須聖之御像卌軀奉造豆卌之師乃悟開介天行布人遠調倍
豆誠乎致志四萬爾八千卷添豆誓願奉讀利飾祈鎭申世利行倍留此之所爲乃態乎
何爾志天陳倍聞江牟止茜刺須終日須加良爾烏玉乃狹夜通左右時日經天思時爾落
湍乃堰倍毛賀禰天世中乃伊須賀志態遠添餝利申志曾上留就中爾大海乃白浪開
豆常世島國成建天到住美聞見人波萬世能壽遠延倍津故事爾云語來留澄江能淵

爾釣世志皇之民浦島子加天女釣良禮來豆紫雲泛引豆片時爾將豆飛往天是曾此
乃常世之國度語良比豆七日經志加良無限久命有志波此島爾許曾有介良志三吉野爾
有志熊志禰天女來通豆其後波蒙譴天毗禮衣着豆飛爾支度云是亦此之島根乃人
爾許曾有伎度云那禮五種乃寶雲波大悲者乃千種乃御手乃人乃世遠萬代延留一種
乎別爾莊天萬代爾皇乎鎭倍利磯上之緣松波百種乃葛爾別爾藤花開榮唐利萬世爾
皇乎鎭倍利鷺波枝爾遊天飛舞豆囀歌比萬世爾皇乎鎭倍利澤鶴命乎長美濱爾出豆
歡舞天滿潮乃無斷時久萬代爾皇遠鎭倍利薫修法之力乎廣美大悲者之護乎厚美
萬代爾大御世成波如八十里城爾芥子拾布天人波擧手豆不拾成奴如八百里磐
根乎毗禮衣裾垂飛波志拂人不拂成天皇乃護之法乃藥乎擎持來候布如是鎭倍
留事者每事雖劣每物非數禰度旅人爾宿春日奈留山階乃佛聖乃奉獻布奈里大御
世乎萬代祈利佛爾毛神爾毛申上流事之詞波此國乃本詞爾逐倚天唐乃詞遠不假
良須書記須博士不雇須此國乃云傳布良牟日本乃倭之國波言玉乃當國度曾古語爾
流來禮留神語爾傳來禮留傳來事任萬爾本世乃事尋者歌語爾詠反志天神事爾用

來利皇事爾用來利本乃世爾依遵豆佛爾毛神爾毛擧陳天禱里志誠波丁寧度聞許志
食豆牟嬰兒乃孩語仁折著乃本末不知亂絲乃亂天有禮度九重能御垣之下爾常
世鴈牽連天狹牡鹿乃膝折反志候聞曾止言須何爾以聞唐牟汗流志兢恐留何爾
以聞唐牟

日の本のやまとの國を神ろぎの、宿那毗古那が葦菅を植ゑおほしつゝ國かため、つくりけむより沖つ浪、たつ年のはに春はあれど、今年の春はものごとに繁り榮えて天つちの、神もよろこび海やまも、色聲かはし梅柳常よりことにしき榮えゑまひ開けてうぐひすも、聲あらためて八千ぐさに、くすしきことは茜さし、天照る國の日の宮の、ひじりの御子ぞひさかたの、天のはしだてふみあゆみ、あもりいましゝ大やしま、天津日嗣の高御座萬代いはふよそとせの、春にありけり我國の、ひじりの君は尊くも、おほましますかひの宮の、ひじりの御子の天の下に、おほましまして御代〳〵に、あひうけつぎて君ごとに、あら人神となり給ひ、おほましませばよもの國、となりの君はもゝつぎに、つぐといふともいかでかひとしくあらむ、そこゆゑに神もうづなひ佛さへ、ゐやまひたまふまず〳〵に、今我君は昔にも、おほましまさじこむ世にも、いかに申さむ釋迦ののり、弘め給ひて家出の人のりのやからを罪あれど、赦し給ひつとがあれど、なだめ給ひつたとへなき、大み惠のいと廣

くおほましませば家出の人、のりのやからは、おほみよゝ常に惜むととし月を、せかへとゞめて過さずて、いはゝむとこそのみ願ひのり、申せしかれども代のことわりと、よろこびの春にありけり、いかにして君のおほみよ萬代に、重ねかざりて榮しめまつらむと柘の枝のよしもとむれば、佛こそ願ひなしたべひじりのみ、しるしはいませそこゆゑに、君をいはふにしるします、陀羅尼のみのりよそまきを、寫しとゝのへまもりなす、ひじりのみかた四十柱、造り奉りて四十の師の悟り開けて行ふ人をとゝのへて、誠をいたし萬代に、八千卷添へてのみ願ひよみたてまつり飾り祈りいはひ申せり、行へるこれのしわざのさまをいかにしてのべきこえむと、茜さすひねもすからにぬば玉の、さよ通すまで日ときへて、思へる時にたぎつ瀨の、せかへもかねて世の中の、いすかしわざをそへかざり申しぞあぐるそがなかに、大海の白浪わけて常世島、國なしたてゝいたり住み、聞き見る人は萬代のいのちをのべつふるごとに、云ひつぎ來る住の江のふちに釣せしきみの民、浦島の子が天つ女に、つられきたりて紫の雲たなびきて時の間に、ゐて飛びゆきてこれぞこの、常世の國と語らひて七日へしからかぎりなく命ありしはこの島にこそありけらし。　み芳野にありしくましね天つ女に、いたり通ひてその後は、せめかゝぶりてひれごろも、着て飛びにきといふ、これもまたこれの島根の人にこそありきといふなれ、いつくさの寶の雲は大悲ざのちぐさの御手の人の世を萬代のぶるひとくさを、ことにかざりて萬代に、君をいはへり磯の上の、緑の松はもゝくさの、

かづらにことに藤の花、開き榮えり、萬代に君をいはへりうぐひすは、枝に遊びてとび舞ひて、さへずり歌ひ萬代に、君をいはへり、澤の鶴いのちを長み濱にいでて、喜び舞ひて滿つ潮の、たゆる時なく萬代に君をいはへり、くず法の力をひろみ大悲ざの、まもりを厚み萬代に、大御世なせば八十里なすきに芥子ひろふ、あめ人は手をだきて拾はずなりぬ八百さとなす岩が根を、ひれ衣裾垂れとばし、拂ふ人拂はずなりて大君の、まもりの法の藥を捧げ持ちきたりさもらふ、かくのごといはへることは事々に、をぢなけれども物事に、數にあらねど旅人に宿春日なる山科の、佛ひじりのたてまつり給ふなり、大御代を萬代祈り、佛にも神にも申し上ぐる事のことばは、この國の本つことばにおひよりて、もろこしのことばをからず書きしるす博士雇はず、この國の云ひ傳ふらむ日の本のやまとの國は、ことたまのさきはふ國とぞ、ふるごとに傳へ來れる、神ごとに傳へ來れる、傳へこしことのまに〳〵本のよの事尋ぬれば歌ことに、詠みかへして神わざに用ゐ來れり、きみごとに用ゐ來れり、本のよにより從ひて佛にも神にもあけのべて祈りし誠は、ねもごろと、きこしめしてむ、みどり子のおさな言葉にをりばしの本末しらに亂れ糸の、亂れてあれど九重の、御垣のもとにとこよかり、ひきゐつらねてさを鹿の膝折りかへしさもらひき、こゐぞと申す、いかにきこえむ汗流しおぢかしこまるいかにきこえむ、

（以上續日本後記）

石蔭

かずならぬ道しはとのみなりきつゝ、はかなく露の起き臥しに、明けくれ竹の生ひゆかむ、この世の末になりてだに、うれしき節や見ゆるとて、早晩とこそまつやまの、高き木ずゑに巣ごもれる、また木傳はぬうぐひすを、梅のにほひにさそはれて、こち風はやく吹きぬれば、谷のこほりも打ちとけて、霞のころも立ち居つゝ、しづゐ迄にも打ちなびき岸のふぢなみあさからぬ、にほひに通ふむらさきの、雲のたなびくあさゆふに、今もみどりのまつにのみ、心をかけてすぐすまに、夏きぬべしときこゆなる、山ほとゝぎす小夜ふかく、語らひわたるこゑ聞けば、何のこゝろをおもふとも、いひやらぬ間のあやめぐさ、長きためしに引きなして、やづまにかゝるものとのみ、よもぎの宿を打ちはらひ、玉のうてなとおもひつゝ、うつ蟬の世のはかなさも、忘れ果てゝはちとせ經む、君が身そぎをいのりてぞ、搔き流しやるかはせにも、かたへ涼しき風のおとに、驚かれてもいろ〳〵の、花のたもとのゆ

かしさを、秋ふかくのみたのまれて、紅葉のにしききりたゐず、世をなが月と言ひ置ける、久しきことをきくのはな、匂ひを染むるしぐれにも、雨のしたふるかひやあると、はかなく過ぐすつき日にも、心もとなくおもふ間に、かしらの霜の置けるをも、打ち拂ひつゝあり經むと、おもひ空しくなさじとぞ、ころもの裾にはぐくみて、塵も据ゑじとみがきつる、玉のひかりのおもはずに、消ゐにしよりは搔きくらす、こゝろの闇にまどはれて、あるべき方もなみだのみ、つきせぬ物にながれつゝ、こひしき影もどゞまらず、袖のしがらみ堰きかねて、たきの聲だにをしまれず、惑ひ入りてはたづぬれど死出の山なるわかれ路は、いきて見るべきかたもなし、あはれ忘れぬなごりには、日數ばかりをかぞふとて、鳴き渡るめるよぶこどり、ほのかに君がなげくなる、聲ばかりにてやましろの、とはに岩瀬のもり過ぎて、我ればかりのみすみの江の、まつ行き方もなみかくる、岸のまに〳〵わすれぐさ、生ひや繁らむとおもふにも、軒にかゝれるさゝがにの、みながら絶えぬたより

だに、結ばざりけむいとよわみ、こゝろ細さぞ盡きもせぬ、むなしき空をおもひ佗び、雁の群れ居しあと見れば、ひとり常世に起き臥しも、まくらの下にいけらじと、憂き身を歎くおしどりの、つがひ離れて夜もすがら、うは毛の霜をはらひわび、こほるつゞらに閉ぢられて、きし方知らず鳴くこゑは、夢かとのみぞおどろきて、消ゐ返りぬるたましひは、ゆくへも知らずこがれつゝ、つりに年經るあまびとも、舟ながしたるとしつきも、かひなき方はまさるとも、刈藻かきやりもとむとも、みるめ渚にうつなみの、跡だに見ゐずさるとも、消ゐなむとは、思ひのほかに津のくにの、暫しばかりもながらへば、なにはのことか今はたゞ、あまたかきつむ藻しほぐさ、潮のたれをかたのむべき、烟絶ゐせぬたきものゝ、この形見なる思ひあらば、ひとり殘さず打ち羽ぶき、ころもの裾にはぐくめと、身のほど知らず賴むめるかな

殿上の花見　左衛門督師房

住吉の岸の姫松色にいでて君が千代とも見ゆるけふかな

君が代はながらの橋のはじめより神さびにける住吉の松　　關白殿

祈りこしことばひとつを住吉のみちには心ちゞにありけり　　内大臣殿

長らへむ世にも忘れじ住の江の岸に波たつあきのまつかぜ　　伊勢大輔

まつ見れば歸らむかたも忘られてまことなりけり住吉の岸　　辨乳母

住吉の岸見わぬまで波よれるみやこのかたもわすれぬるかな　　小辨

住吉にまつも行幸はありけめどこはめづらしきみしま江の浦

音にのみ聞きしもしるく住の江の波立ち歸ることぞもの憂き　　兵衛内侍

名にたかき君が行幸ぞ住吉のうらめづらしきためしなりける

眺めつゝみまくぞ欲しき住の江の松もうべこそ年のへにけれ　　辨内侍

揖合

住の江においそふ松の枝ごとに君が千歳の數ぞこもれる　　太夫

松のしづ枝

住吉の神もあはれと思ふらむ空しき船をさしてきたれば　　後三條院御製

沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづえをあらふしら浪　　左大辨經信

たぐひなき君が行幸のうれしさに千歳をゆづれ住吉のまつ　　宰相中將隆綱

いにしへはけふの行幸のためにとや天降りけむ住吉の神　　右大辨伊房

住吉の神のしるしにいにしへの松の千歳は君にゆづれり　　右兵衛督實季

住吉の神にとはゞやいにしへもかゝる行幸はあらじとぞ思ふ　前丹後守公基朝臣

住吉の松に千歳を君が代のうれしくのみぞみしまねの岸　備中守信宗朝臣

いにしへもかゝるみゆきはありやせし夢にも語れ住吉の神　内藏頭經平朝臣

この度の祈は空に知りぬらむあまくだります住吉のかみ　左中辨實政朝臣

神代より生ひそふ松は住吉のけふの行幸をかねてこそしれ　右馬頭資宗朝臣

住吉の神のしるしに君が代は松のとかへりおいかはるまで　右京太夫通家朝臣

あらじかしかゝる行幸は住吉の松よりさきの人にとはゞや　丹波守經成

あかざりし都の花の色よりも心ぞとまるすみよしのまつ　左少辨師賢

住吉の千代にひとたび逢ひぬれば松のかひある旅にもあるかな　右少辨匡房

萬代の君が行幸にゆく末の年をばゆづるすみよしのまつ　左兵衛佐顯實

色ことに今日は見えけり住の江の松の下枝にかゝる白波　因幡守忠季

住吉の神の御垣も代々をへて君が行幸を待つにやあるらむ　左衛門大夫資清

住吉の松の緑もこのはるは君が行幸にいろことに見ゆ　刑部丞俊範

二方にかゝる行幸を住吉のまづめづらしく神も見るらむ　左近將監爲房

千歳へむ君がみゆきのためしには霞たなびく住吉の松　左衛門尉俊宗

住吉の松に絶えせぬ風のおとに岸うつ波の聲かよふなり　女房

君が代は風も心をよせつれば枝のどかなる住よしのまつ　一品宮女房

遙かなる君がみゆきに住吉の松に花咲くたびとこそみれ

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむ住吉の松

天降る神のしるしに君にみなよはひはゆづれ住吉のまつ

まつ程は久かりしを住吉のみてはほどなくかへりぬるかな

かずへやる方こそなけれ住吉の松の千歳は一木ならねば　（以上榮花物語）　崇德上皇

都には今宵ばかりぞ住の江の岸みちおりぬいかでつみ見し　（保元物語）

すべらきの中　後三條天皇

住吉の神も嬉しと思ふらむむなしき船をさしてきたれば　（今鏡）

煙の末々　藤原實氏

けふやまたさらに千歳を契るらむむかしにかへる住吉の松　（增鏡）

今見てぞ身をも知りぬる住の江の松より先に我は經にけり

住の江にふねさし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく　（以上土佐日記）

絶えてなほ住の江になき中ならば岸に生ふなる草もがな君

住吉の岸に生ふとは知りにけり摘まむ摘まじは君がまに〳〵　（以上蜻蛉日記）

ほど知らぬ命ばかりぞ定めなきちぎりしことは住の江のまつ
（和泉式部日記）

いかにいひ何にたとへて語らまし秋のゆふべの住吉の浦
（更科日記）

年を經て浪立ち寄らぬ住の江の待つかひなしと聞くは誠か
（竹取物語）

雁鳴きて菊の花咲く秋はあれど春の海べにすみよしの濱

我れ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく代經ぬらむ
（以上伊勢物語）

住の江の松ならなくに久しくも君とねぬ夜のなりにけるかな

久しくは思ほえねども住の江の松やふたゝび生ひかはるらむ
（以上大和物語）

澪標

住吉のまつこそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば

荒かりし波のまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする

若葉

たれかまた心を知りて住吉の神世を經たるまつにことふ

住の江をいけるかひある渚とは年經る蜑も今日や知るらむ

昔こそまづ忘られね住吉のかみのしるしを見るにつけても

住の江の松に夜深く置く霜はかみの懸け添ふる深き夜の霜
（以上源氏物語）

戀

忘草つみにこしかど住吉の岸にしもこそ袖は濡れけむ

神祇

幾返り浪の白木綿かけつらむ神さびにけり住の江の松

二條院の御時世爲二四代之侍臣一尚在二雲客之列一故左大將十首之題之中
江上月

思出でよ神代もみきや天の原空もひとつに住の江の月

前馬助敦頼住吉の御社にて歌合すとて當世の歌よみどもに歌すゝめ侍りし時三首の中社頭月

心なき心もなほぞつきはつる月さへすめる住吉の濱

住吉の社の歌合に述懐の歌とてよめる

徒らにふりぬる身をも住吉の松はさりともあはれしるらむ

神祇

敷波にたのみをかけし住の江の松とや今は思ひすつらむ

祝

住吉の松も涼しく思ふらし君がちとせの和歌のうらかぜ

（以上長秋詠藻）

住吉の岸に生ひける松よりもなほおく深く秋風のこゑ

住吉の松の下枝を洗ふ波こほらぬ聲ぞいとゞ寒けき

院にて當座の御會に松を

住吉の神やまことに言の葉を君につたへし松風の聲

（以上秋篠月清集）

住吉の松の千歳と君が代といづれひさしき神に問はゞや

萩

住吉の遠里小野にきて見れば眞萩が枝に花咲きにけり

隆闍梨詠二百首於一日一之由來語仍誠企二風吟一之間午終又未始歟右筆則酉一點書付了　建久元年四月八日詠レ之也

住吉の神もあらたに御覽ぜよ三ときにたらでちる言の葉を

松

住吉のうらの梢に吹きとめて波にもやどす松の秋風

住吉松

波にふけ霞の春のあさみどり風も色あるすみ吉の松

住吉

思ふことつもりの浦の藻鹽草いくら茂りぬ住吉の神

秋日詣二住吉社一詠三百首和歌一雜五十首

法のごとく蓮の糸をくりしかごなほみだれじな住吉の神

法の花散りしむしろにのぞみてやひかりをましゝ住吉の神

石川のつかのむかしをたづねしをあはれとや見し住吉の神

とにかくに昔をすくふおほ網にあはれをかけよ住吉の神

心ざし深きあまりにたづねきぬあはれと思へ住吉の神

さてもさぞ思ふこゝろのするゑやなに行くへを守れ住吉の神

世の中の深きあはれを知りながらよそぢに過ぎぬ住吉の神

さのみやはことぞともなく世にもへむあはれいざさは住吉の神

世の中の世の中にてもあるならばくやしかるべき住吉の神

松風にまかする舟を極樂のきしまでおくれすみよしの神

神もけに今は浮世をいとふらし住吉の名をあらたむるまで

風もかくいかでこの世を厭はでは今日までもさは住吉の神

かくばかり住みわぶる世は住吉の神ばかりにぞ祈るべらなる

我も人も唯こゝろをぞ厭ふべきおほかたの世は住吉のみや

浮世をもなほ住吉と思ふらむ人のこゝろはげにもはかなき

さらでだになほ賴むべき住吉にふるさといとふ我が心こそ

住吉と思ふべき理を知りながらいかにこの世をすつる心ぞ

年ふれど色もかはらぬたもとかないつかうき身は住吉の神

我が袖をなみだにのみやくだすべきめぐみをかけよ住吉の神

厭ふべしさてながらへば住の江の松ことては世の憂めのみ

よそぢまでうれへの緒には繫がれぬさて我がゆるせ住吉の神

住吉のきしかた知らぬ身なりせば今行くすゑも賴まれやせむ

夢の世をさまして住まむゆくすゑに思ひあはせよ住吉の神

人も見よ神もあはれめ住の江にそこの心を浮べつるかな
住の江の深きながめの夕かなこゝろの底を神は知るらむ
さてもなほ我が思ふことは住吉の松風ならで三吉野の山
浦風を松のこずゑに吹きとめて袖をもわする住の江の暮
住の江とながらの橋の舊き跡とこゝろにたぐへかよふ秋風
住吉の海にかたぶくゆふづく日うきみの影も哀れいつまで
住吉の松のあらしにかよふなり阿波の鳴門の浪の音まで
住よしのうらのうきねの寢覺には松風たゝむ沖つしら波
梢よりおきつしほかぜわたらずば音には聞かじ住吉の神
住吉の松の葉ごしに見るべきは遠ざかり行く沖の釣ぶね
住吉のまつの下枝にゐる鷺は立つ白波のかゝるなりけり
あはぢ島つきにぞいとふ住吉の松かぜはらふ有明のそら
住の江のあからさまなる小舟まで哀を見するあとの白波

なが月は月のみならず住吉のはまにも人はさかりなりけり
住吉の神もところをわきければしたひ來にけり秋の夜の月
住吉の庭火のけむりのぼれども曇ることなきあかつきの星
住吉にいのる心のすゞしきはしで吹きまくる庭のまつかぜ
住吉の岸もなみだをかけつれば和歌の浦波なにかあるべき
住吉の池に浮べるうたかたをうきにかへてぞのこすはかなさ
沖のなみ袖にたえねば住吉の神にこゝろのかゝるなりけり
たづね來て我が住吉とおもふより神の心も知られぬるかな
住吉の神はさりとも數ふらむなしき舟のさしてこしなみ
住の江のむかしは今になりにけり浮世の中もかゝらましかば
住吉のまつの梢をながむれば神さびにけるほども知られぬ
いづくにも松は常磐にあるものをなぜ住吉に名をとゞめけむ
行く末も常磐なるべきみどりかな神代はるけき住吉のまつ

行末にまた住吉のまつもかななほ浦づたふながめにもせむ

四季述懐各十首　春

住よしの松のこずゑのうは霞ことわり過ぐる春のいろかな
住の江のみぎはによする春の涙は氷をぐして歸るなりけり
鶯のこずゑにきゐるはつ音よりいろにいろそふ住の江の松
住吉の里のあたりにさくら咲けばまづ風かをる春のあけぼの
朝霞たなびくほどは住吉のこずゑにつゞくこやのまつばら
住吉の松のあたりに咲く花はたがひに色をゆづるなりけり
住吉の春のやなぎのあをみどり松なき庭のけしきなりけり
松風のおきよりかへる住の江は下枝に涙のはなぞ散りける
家を出でたづね來たればめにぞたつ藤波かゝる住の江の松
住の江の松のうは葉に春ふけてかはらぬ色に色ぞありける

夏

住吉の松にも來鳴けほとゝぎすさてこそ聲のいろも見えけれ
住吉のかみもまつとやおのが音を手向けてすぐる郭公かな
早苗とる菅のおがさのならぶさへ外にことなる住吉のみね
住の江の汀の菖蒲からで見むほかのは軒のものとなるとも
五月雨の住の江殿に日をふれば海よりいけにかよふ白なみ
住の江のよるの螢のあはれさをなほ思はする松のかぜかな
住の江の松かぜ吹かぬ夏ならばあつさもいかゞ蟬のもろ聲
住の江にそむるこゝろは似たりとも蓮の色はさやけかるべし
煙ゆゑ鹽屋とよそにおもふらし蚊やり火立つる住吉のさと
暑さをば松のあらしにをさめおきて秋を浮べる住の江の池

秋

風もさぞ心つくしに來る秋を住の江とのみまちとりてさは
おきつ風あはれはいかに住吉の松のこずゑと荻のうは葉と

吹くからに涙のあはれのうちそふはげに住吉の松の秋かぜ
思ひ入れて松吹く風を聞くとならばたゞ住の江の秋の夕暮
住の江のいかきのもとの虫のねよおのが聲にも松風のある
住の江のしまのむら萩露もなししばしな吹きそ松の浦かぜ
住吉のしきつの浦の夕されに鹿の音わたす武庫のやまかぜ
おしなべてみな住吉の松のなかに秋をこめたる蔦の色かな
暮の秋住の江どのゝ池に來て涙間のつきにこゝろすましつ
住吉の遠里小野の萩が枝もうら枯れわたるあきのさびしさ

冬

住吉の庭もこずゑも霜がれて冬こそまつのいろはありけれ
木の葉にもまぎれぬものは住の江の時雨にたぐふ庭の松風
住吉の松のこずゑのしぐれずば葉かへぬ色もかひやなからむ
初雪の松のこずゑに散るほどはこゝろあらなむ住吉のかぜ

さよ千鳥聲こゝろせよ住の江の風のあはれを松にまかせむ
住吉の松風かよふはま千鳥ながめにあまる聲きこゆるなり
こはいかに霜さえる夜の鴛のこゑを住の江に聞く冬の曙
住吉のふゆのあしたの霰こそいがきのうちに玉はじきけれ
住吉のこずゑの雪のした緑かぜよりもなほさむきいろかな
住吉はよはひつもりの浦なれば神は年をやおしまざるらむ

述懷

祈るべしむかしにかへる我が國をさてながらへむ住吉の神
ふかき風松のこずゑに吹かずともこの世みだすな住吉の神
四の海に立つ白波を住吉のおまへのしほにをさめてしがな
みだれゆく世にこそ頼めもろこしを我が國になす住吉の神
うとけかれ三笠の山の藤なみをかけても祈るすみ吉のまつ
いかでわれ人のこゝろを住吉と思はむ國に身をやどさまし

我が思ふこゝろはあれどことはなしたゞ住吉の神のまに〳〵

露の身の消えむゆふべをまづしらむかへすゞ〳〵も住吉の神

住吉にいくかもあらぬ今日のまにほふなみだは百草の露

もしほ草しきつの浪に朽ちぬともあはれはのこせ住吉の神

俊成入道右の百首を見てよめる

返し

神もいかに心にそめてしらしけむ御法ののちの言の葉のいろ

法のすゑを今こそ神も照らすらめ君がそひつる言の葉を見て

建久三年凉秋九月點二定開之山寺一披清淨之道場一半行半座之勤如レ說修レ之無二無三之教如レ法書レ之則捧二持二部妙典一遙往詣二四天王寺一於二彼靈地一忽經二再宿一然間或備二十箇種之供養一或唱二一晝夜之念佛一翌日之朝底露之餘即詣二上宮太子之古墳一渠疑二下代衆生之態地一次過二難波之海浦一到二住吉之社壇一報賽已了瞻望忽催于レ時雲海眇花嵐日蕭索不レ堪二感情一聊述二舊懷一短略未レ過二一日一和言已滿二百首一其詞雖レ區恙置二住吉之詞一其心雖レ淺又顯二滅罪之心一丹誠無二玄應豈空抒二退憶一古今未レ聞二蹤跡一仍雖レ恐二藻思之拙一竊納二聚詞之中一古松若有レ情言葉定無朽者歟

我立杣門人三部傳法阿闍梨某記之

春

君が代の春のためしは住吉のまつにかゝれるかすみなりけり

秋

身のうさを和歌のうらわにながむれば心にうかぶ住吉の松

冬

きくたびに袖にうちそふなみだかな秋住吉のまつのうらかぜ

岸邊寒蘆

住吉のきしかた凍る蘆の葉は枯れていろあるこゝちこそすれ

海邊千鳥

あはぢ島千鳥とわたるあかつきに松のかぜきかむ住吉のうら

松經年

住吉の松をひさしと數ふればすぐる千年のするもありけり

夏曉

夏の月に有明の山は淡路しま住吉の松にかぜぞすゞしき

住吉の松にかすみの色そめて春のみなとにはるかぜぞ吹く

寄レ月　祝

君が代の雲吹きはらふ松風にすみよしの浦のつきを見るかな

（以上拾玉集）

俊惠天王寺にこもりて人々ぐして住吉にまゐりて歌よみけるに具して

住吉の松が根あらふ波の音をこずゑにかくるおきつしら浪

なみにやどる月をみぎはにゆりよせて鏡にかくる住吉の岸

かすかくる波にしづ枝の色染めて神さびまさる住の江の松

（以上山家集）

戀二十五首　寄名所戀

住の江の松の妬くや寄る波のよるとはなげく夢をだに見で

江上月　忘却又詠雖二見苦一力不レ及

住の江の松が根洗ふ白波のかけてよるとも見えぬつきかげ

住吉の濱

白菊のにほひし秋もわすれ草おふてふきしの春のうら風

住吉並依羅の社に求子の歌よみて奉るべきよし祠官申しゝかば奉りし

住吉の松が根洗ふしき波にいのる御かげは千代もかはらじ

承元二年の秋少將具親三社にて歌講ずべきよし申しゝ中に、住吉

つれもなくなほ住の江に手向草ひきすてらるゝ跡の朽葉を

搔きつめし松のしき波色わかぬ藻屑なりけりみさへ朽ぬる

（以上拾遺愚草）

海

今日ぞ見る春の海邊の名なりけり住吉のさとすみよしの濱

雨後終宵欹レ枕聽、松聲如レ舊水聲添

住の江の松のうれ吹くなみかぜにこのごろ蟬の聲ぞうちそふ

海邊松雪

住吉の松やいづこと降る雪にながめも知らぬとほつ舟びと

（以上拾遺愚草員外）

雜六首

松風や敷津の浦にゐるたづのちとせをまもる聲かはすなり

君がため蓬が島もよりぬべしいくくすりとる住吉のうら

祈りこふ星のやどりも雲晴れて幾代も君が住吉のさと

とそちつゝ四の社をくはへます玉の緒長く君ぞつかへむ

名も著し年も津守の國こへてなほも八十の阪ぞゆくべき

朽ち殘る霜のしたなる言の葉もあはれとおもへ住吉の神

雜

住の江のつきに神代のことゝへば松のこずゑに秋風ぞ吹く

忍戀

住吉のはま松がねの下はへに難面きひとを戀はぬ日ぞなき

月の歌とて

秋の夜は月のひかりも住吉のいでみの濱のありあけのそら

夏

住の江に引けどつきせぬ菖蒲草千代の五月や契おきけむ

秋

住吉の里の霜夜の秋風にころもやうすきころもうつなり

冬

住吉の松やつれなき夕時雨とわたりかへるあはぢ島やま

（以上壬二集）

住吉のきしを田にほりまきし稻の刈るまで妹に逢ぬなりけり

（柿本集）

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふるおきつしらなみ

（躬恒集）

住の江のふた道を行く道無しと人に知れぬることいたきかな

ある女に

（家持集）

住の江の岸をりかへし返してもたちよらまくのほしき君かな

返し

打ちしきりたちよりてとも岸遠みよそにぞかへる沖つ白浪

（以上清正集）

住吉のかたかきて侍る所

住の江のとしふる松のよはひをば返る〳〵も涙やかぞふる

（能宣集）

住よしの岸の藤波我がやどの松のこずゑにいろもまさらじ

（兼盛集）

夏

住の江の朝みつしほに御禊して戀わすれ草つみてかへらむ

住の江の波にはあらねどよとともに心を君に寄せ渡るかな

住の江の松のけむりはよとともに波の數にぞかぞふべらなる

恒佐の中納言の扇合の歌扇を洲濱に入れたり

住江のまつの風をもこめたればあふぐ扇のいつか絶えせむ

（以上貫之集）

同じ后の宮の御賀おほきおとどの仕り給ひし題の、住の江の濱に鶴立てり

住江の濱の眞砂を踏むたづはひさしきあとをとむるなりけり

男の兄なりし人

住吉の岸にきよする沖つ波まなくかけても思ほゆるかな

返し

住吉のめに近からば岸にゐて波のかずをもよむべきものを

（以上伊勢集）

逢へるをよろこぶ

住吉の里行きしかば初花のいとまれに見む君に逢へるかも

（赤人集）

松の木に藤かゝれり、男をんな群かれ居たり、あるひはをりてさる

住吉のきしの松こそ思ほゆれ手にさへかゝる藤なみの花

（源順集）

住吉の浦の玉藻をすくひあげて渚の松のかげをこそみめ

早う物云ひはべりし女の或所に物云ふ聲をきゝはべりて聲ばかりこそと云ひはべりしかは

住吉の松より越えし波のおともむかしながらに聞えけるかな

（以上元輔集）

相知りて侍る人日頃久しくとはずしていきたるにかくせば

住の江の松に立寄る白波のかへるをりにやねをばなくらむ

をりはへてきみが薪に漕ぐ舟は住江にこそほどはへにけれ　（忠岑集）

忘れがひよせもやすると住吉の岸うつ波をかぞへつるかな

忘れがひ拾ふばかりに住吉のうらみてわたるほどはへにけり

住吉のうらみつべくぞ思ほゆる潮の干る間もいまは無ければ

住吉の岸のしらなみ袖ひぢて今はいふかひなくぞなりぬる

住吉の戀忘草たねたえてなきよにあへるわれぞわびしき

直垂取らせむとすれど裏なむ無きといふ人に　（以上元眞集）

住吉のきしともいはじ沖つ波なほうちかけよ浦はなくとも

京のたよりなかりければ、津の國に住まむとて行く道に、知りたる人あひて、なにしにかくは行くぞと問ひければ、

都にはありわびぬれば津の國の住吉と聞くさとへこそゆけ

かれより京へ云ひおこす

津の國のわが頼みこし住吉もたよりなみこそ間なくたちけれ

津の國に年頃身を沈めて籠り居たるを、その先の帝聞しめして、召しあげさせ給ひてけり、よさり藏人所に侍ひてまかでにけるあしたに、ありとしの朝臣しておほせ給ひける

見しかどもなにともしらず難波潟波のよるにて歸りにしかば

御返りまゐらす

住吉の松とほのかに聞きしかばみちこし汐やよるかへりけむ

給に住吉のかたをかけるを

住吉のまつも老いぬとおもふらむかげにも波の添ひてみゆれば　（以上忠見集）

住吉の岸のふぢなみ春ふかくいくしほにかは色まさるらむ　（中務集）

宮より藤三位のもとに

思ひ知る人をし見れば世の中にそむかぬかたも哀なりけり

御返し

住吉のつきせぬ浦をながむれば（三字脱）光の玉とこそみれ

住よしのならしの岡の玉造りかずならぬ身は秋ぞかなしき

（以上御堂關白集）

住江の松のみどりのそでながら名をだにかへばものは思はじ

女院の住吉にまうでさせ給ふるに式部卿宮の中將のうちのおほんせじにて參り給ふるにつけて左の大殿大宮の大夫の御許に　山野の宮

（以上曾丹集）

都人ありやと問はゞ津の國のこふのわたりにわぶと答へよ

と聞えければ

さそはれぬ身こそわびつれ津の國の難波の浦を思ひやりつゝ

冬住吉に始めて詣づるに

まだ知らぬ難波の浦の蘆間わけ漕ぎゆくかたや住吉の岸

まうで着きて舟よりおるゝほどに松を見て

これやこの神代ひさしくなりぬれど時は變らぬ住吉の松

願はたす人の神樂するを見るに長き榊に松をとりそへたるに

榊葉に千代の小松を取り添へて今日よりまつる住吉の神

女房などありて住吉の姫君のことなどいふに

尋ねけむ昔のことのしらべとは吹く松風ぞきゝなされける

かへるほどに

住の江の波たちかへるほどもなしなに長居すと昔いひけむ

（以上祭主輔親卿集）

九月ばかりさか井といふ所に汐湯あみにおはしたりけるに姫君の御もとに

住吉のながゐの浦も忘られて都へとのみいそがるゝかな

かへし

立ち歸り日ごろのふれば住吉のなほ長居する浦とこそ見れ

（以上權中納言定頼集）

硯がめにさうぶの根をきりて入れたりしに、生ひ出でたりしをまゐらすとて

たれか見し世に住の江のもろびとの硯のかめにさす菖蒲をば

かへし門の君

住の江の硯のかめの菖蒲草ちよのためしに引きてこそ見め

（以上大貳三位集）

住吉のあまくだりけむその神のあはれ相生の松をしぞ思ふ

としつなに具して住吉に詣でてよめる

（源賢法眼集）

住吉のあらひと神のひさしさに松もいくたび生ひかはるらむ

賀茂の禰宜成助に始めてあひて

（權大納言經信卿集）

きゝわたる御手洗河のみず清みそこのこゝろは今日ぞしるべき

かへし

住吉のまつかひありて今日よりは難波のこともしらすばかりぞ

その日まうできあひて

祇園別當良遐

住吉の御手洗河も流れ合ひてこのわたりこそすまゝほしけれ

或人紀の國へ降るとて住吉を過ぎて堺といふ所にて止まり侍りしかば

住吉のわたりにだにも音せねばさかひのさとを思ひこそやれ

或る人の住吉に參りてよみ侍りし

いたづらに老いにけりとや住吉の松も我が身を今日はみるらむ

かへし

君が代やちとせまでへむ住吉の松にひさしきともと見えつゝ

津のかみ範永住吉に神拜すとて

我身こそ神さびまされ住吉のこだかき松のかげにゐぬれば

かへし

住吉の松のよはひに肖えぬれば君をも千世の友とこそみれ

住吉に人々多くまゐりて雨の降りしにぬるゝ事をいひしかば

濡るゝにて思ひしらなむもろびとは天降りたる神のしるしを

故讃岐守に始めて逢ひ聞えさせたりしに詠みかけられたりし

住吉の松をぞたのむ今日よりは千年はふとも思ひかはらじ

かへし

住吉のまつの千年もあかなくに萬代までを今日はちぎらむ

住吉に賀茂の神主なりすけくだりたりと聞きて　加賀左衛門命婦

葵草おふとし聞けばすみよしの岸にぞ今はつむべかりける

かへし

住吉は忘れぐさぞといはるれど人にあふひを植ゑてまつなり

あはの國よりかみのゝ道からまかり上りしに、駿河に入江の浦といふ所にて、風ふきて八日まで舟を出さず、あやしみ歎くほどに人の夢に、住吉のひとのする事もなくておりのぼりするがやすからねば、おきながふかする風なりとなむみえると語れば、驚きて尋ぬればなぎさに神の社ありみをの明神と申す、俄にみてぐら挾みてしでに書きつけ侍りし

國基

みをの神住むと聞きてぞ入江なるなぞ舟据て日數へぬらむ

（かくてぞ程なく風やはらぎ波靜かにて舟出たし侍りし）

おほやけに申す事侍りしに申し文にそへて奏者の御もとに

住吉のあまつやしろのうれへには心よせなれ雲のうへびと

同じく申す事のほどすぎ久しかりしかば

雲の上は月ぞさやかにさえ渡るまだとゞこほることや何なり

兵衛佐　かへし

とゞこほることはなけれど住吉のまつ心にやひさしかるらむ

公に申す事のともかくも仰せ下され侍らざりしかば住吉へまかりくだるとて奏者の御もとに

早晩とみこときかまく住吉のまつなる神にいかゞいふべき

江中納言太宰帥になりて下られしにかはじりにまかりむかひて物語のついでに

六年にぞきみはきまさむ住吉のまつべきみことといたく老いぬれ

かへし

すむ人の過ぎゆくわれも住吉の松の千年といのらざらめや

同じ人におほえびを聞えさすとて

住の江の翁すがたぞあはれなる海に老いつゝこしのかゞまる

かへし

わだつみのおいな歎きそ住吉の松にかゝれる沖つしらなみ

同じ人の播磨くだりにかちしなりしかば

もろともに鞭はあげねど慕はるゝ心は君におくれやはする

かへし

心をばおなじ道にはたぐふともなほ住吉のきしもせじかし

前左衛門佐のもとより久しく音せずとていひ遣したりし

水籠りにひとひもおちず思へども人わすれけりすみよしの松

か へ し

すみの江の松に絶えせず吹く風ぞきつせそへつゝ忘れやはする

住吉の堂のいしとりに紀の國にまかりたりしに、和歌の浦の玉つ島に神の社おはす、尋ね聞けば衣通姫のこの所をおもしろがりて、かみになりておはすなりと、かのわたりの人云ひ侍りしかば詠みて奉りし

としふれど老いもせずして和歌の浦に幾代になりぬ玉つ島姫

かくよみて奉りたりし夜、夢にからかみあけてもから衣きたる女房十人ばかり出で來りて嬉しき喜びにいふなりとてことるべき石どもを敷へらる。敷のまゝに求むれば夢の告げのまゝに石あり。いしづくりしてわらすれば一度に十二にこそわれて侍りしが壇のかつらばしにかなひ侍りにき

賀茂神主なりつぎに奏こふとて

むつまじく賀茂の葵を住吉のまつのゆふにもしてまほしきを

なりつぎ奏をばめでたくしたゝて遣して返りごとは力及ばずと云ひ侍りしこそなか〳〵ありつきたりしか。

（以上津守國基集）

住吉に參りてよみ侍りける

住吉のまつことはむ神代よりわがことしづむ人はありやと

住吉の國基いと近くゐたりと聞くに音せざりければ、云ひ遣しゝ

水籠に一日もおちず思へどもわれわすれける住の江の松

（津守國基家集に類歌あり）

（以上藤原基俊集）

新院仁和寺殿にて人々に和歌よまさせ給ふとて中務大輔季宗がこひしに松間紅葉といふ題を

すみよしの松の絶間の紅葉にや津守のあまはあきを知るらむ

（左京大夫顯輔卿集）

住吉社

住吉の濱松が枝のゆふけむりはれぬおもひは神ぞ知るらむ

備前の守にくだりけるとき、江暮春といふことを

（清輔朝臣集）

住吉のまつもや思ふ月もまたほそゐに霞むはるのなごりを

ほとゝぎすをよめる

住吉の松としらずや子規岸うつ波のよるもなからむ

（以上故刑部卿集）

夏の題をおの〳〵たまはりて歌奉りしうちの螢

住の江の淺澤すだくなつむしを草葉にぬける玉かとぞみる

權中納言俊忠集

永久元年九月依二山大衆事一下二向阿尻邊一歴二覽住吉社一於二住江一詠

住吉のたむけの旅にあらねどもあはれはかけき沖つしらな

中納言雅兼卿集

枇杷殿にてこゆみのかけ物にせられたる

みすみよしの岸に咲くてふ藤ならで何をか春の末にかくべき

か へ し

住吉の岸ならずともふぢなみの心をわれにかけてみよかし

（以上相如集）

大内にて殿上の人々藤花映レ水といふ心をよみはべりしに

住の江のみぎはに松のなかりせば二木に藤を懸けてみましや

海邊月

住吉の松の木まより見わたせばつきおちかゝる淡路島やま

侍不レ來戀

住吉のまつとはすれど沖つ浪たちかへるにもよらぬ君かな

來不レ逢戀

住吉のおきよりきたる浪ならば松の根も見で歸らましやは

（以上從三位頼政卿集）

海邊春月

住吉の松のこがくれゆく月のおぼろにかすむ春の夜のそら

戀の歌

住吉のまつとせしまに年も經ぬちぎりのかたそぎ行き合はずして

寄松祝

住の江のまつことひさになりにけり來むと頼めて年の經ぬれば

住の江に生ふてふ松の枝しげみ葉ごとに千代のかずぞこもれる

聲うちそふる沖つ白波といふふるごとを人々あまた仕うまつりてし次でによめる

住の江の岸の松ふくあきかぜを頼めてなみのよるを待ちける

屏風の歌

住の江の岸の姫松ふりにけりいづれの世にか種は蒔きけむ

（以上金槐集）

住吉の岸ともいはじ忘れぐさ人のこゝろに生ひけるものを

（源有房朝臣集）

住吉のかたに侍りし頃或る處より虫とりて參らせよと仰せられしに虫屋のうへに書き侍りし

君がためかねてうゑにし里なればちよの秋しるまつ虫の聲

春のころ平の行胤天王寺に詣でて住吉へ申し送り侍りし

住吉のまつひともがなたづねみむかすみに浦は道しらずとも

返し

霞めどもまづみる浦も知りながら心のうちをいかゞへだてむ

少將伊成朝臣住の江にて一兩日遊びてかへさの道よりたか犬をこひはべるとて

敏鷹のこの朝ばかりひきそへよ今にもよりも鳥やたつまと

少將また都より

今よりは思ひしそむな住吉の松のあらしのおとのはげしき

住吉の蜑のたくなはうちはへて忘るゝ草は枯れやはてなむ

思ひ出づるこゝろぞ深き住吉を淺澤小野とたれかいひけむ

返し

今よりの松のあらしのはげしきに聞かましかばとまづ覺えつや

すみよしの蜑の拷繩くる人のかるれば枯れぬ草の名ぞうき

思ひ出て深きこゝろも頼まれず淺澤小野に殘るおもかげ

月の明に侍りし夜住の江の釣殿にて連歌し侍りしに神主國平が許より

かずならぬ言の葉にのみうづもれてよそにぞしのぶ住の江の月

返し

住の江の月もいろそふことの葉によそなる人のこゝろをぞしる

住吉に侍りしに都より知りたる女房あまた天王寺に詣でて侍りしかば、住吉の神主經國の女におほひがひこはむと思ふに、歌のそへうきよし申し侍りしかば詠み て遣し侍りし

波よする津守の浦による貝をひろはぬ袖にうつせとぞ思ふ

返し、貝にかきて

尋ねきて拾はぬ浦のつらければ袖につゝむにかひやなからむ

（以上藤原隆祐朝臣集）

左大臣

住吉のまつ吹くかぜのさびしさも今ひとしほの春のあけぼの

越前

住吉の松蔭あらふおきつなみしたにや秋のかぜかよふらむ

三宮

住吉の細江の蘆もしもがれてよそにもしるきみをつくしかな

住吉のまつもすゞしく思ふらし君が千年の和歌のうらかぜ

宮内卿

住吉の松のみどりと君が世をいづれひさしと神ぞしるらむ

家隆朝臣

住吉の松のこずゑのふか緑つもれるはるのいろぞみえける

公繼卿

住の江の月に神代のこと問へば松のこずゑに秋風ぞふく

隆信朝臣

かくれがの庵はすまじ住の江にいつもながめむ松の秋風

良平

住の江の松風かよふからことを涙のをかけて潮や引くらむ

（以上千五百番歌合）

判者入道判書の奥に書きつけて云ふ

住吉の松はあはれをかけやせむ八十路過ぎぬる和歌の浦涙

左將軍の御返事に云ふ

和歌の浦の知るべとなれる老の波げに住吉の松も知るらむ

（以上六百番歌合）

住の江の松にとはゞや世にふればかゝるもの思ふ折やありしと

（和泉式部集）　爲家

住吉の濱田の早苗おいぬとてけふぞ五月といそぎとるなり　家隆

早苗とる御田の植女も色々の袖をつらねていはふけふかな　右大臣

夕されば錦とみゆる住吉の岸野の萩をあらふしら波　爲家

住吉の岸田の春の若草にたなれのものはたちもはなれず　俊成

むらさきの色は深きを杜若淺さわ小野にいかで咲くらむ　信實

住吉のきしもせしとや小夜千鳥長居のかたへ浦傳ひ行く　法印覺實

鳴き捨てゝ急ぎな過ぎそ時鳥長居の里の名をぞ賴まむ　定賴

九月ばかりにながるの浦といふところにしほゆあみに出て

住吉の長居の浦も忘られて都へとのみ急がるゝかな　爲家

尋ねてや蕨折るらむ住よしの遠里小野の春の里びと　家

待宵は遠里小野の油賣つらきは今朝の皮かふのころも　よみ人しらず

逢ふことは遠里小野の油賣またぬにつぐる曉のかね　能印法師

あし引の山の高嶺に登りてぞ朴津の海は近く見へける　知家

さ夜ふけて霰松原住よしの浦吹く風に千鳥啼くなり　定忠

浦風のあられ松原ふきまとひ玉よせかぬる住の江のなみ　慣正行意

冬もいま日數つもりの浦さへて雪にもなりぬ霰まつ原　（以上夫木集）

江霞

霞しく春の光に見渡せば千年はしろしすみよしの松　（長秋詠藻）

海春

かりなきて菊の花咲く秋はあれど春の海べに住吉のはま　（業平家集）

浦五月雨

涙かへる松のしづ枝も折れぬべしひかず津守の浦の五月雨　重賢（題林抄）

岸松麥

住吉やこすのとこ夏くれながら岸野の原の花も忘れず　爲尹（千首歌合）

風かよふかたへに露やこほるらむ夏と秋との往合の杜　中務（中務家集）

夏はまたいでみの濱を住吉と眞柴折りしき誰が涼むらむ　内大臣（名寄）

住吉のこすの常夏それながら岸野の草の花も忘れず　定家

住吉の粉洲のとこなつ咲くも見ず隱てのみや戀わたるらむ

いかにして淺澤沼のかきつばた紫ふかくにほひ染むらむ

（家集）　宗良

住よしの細江こぎ出る海人小船あしまあらそふ夜半の月かげ

（千首歌合）　覺性法親王

すみよしの岸の松風わたるなり細江のなぎさこほりしぬらむ

（萬代集）

一休住吉に參籠通夜し給ひけるに又老僧一人同じく籠りいたりしが一休和尚に問て曰和尚うたこと詠み給ふやと一休かたの如く詠候とて言下に

來て見ればこゝも火宅の宿ならめ何すみよしと人のいふらむ

かの老僧うち笑ひて

來て見ればこゝも火宅の宿なれど心をとめて住めばすみよし

とかく物がたりに東のそらもしら〳〵と夜もあけはなれぬれば老僧は何所へゆきけん見えずなりぬ。さる程にいとありがたくおもひ給ひて爰に菴をむすび給ひけるとなん。

（一休物語）

その神主國基が、持佛堂たて侍りしにつま戸をえさせ侍るとてかくいひつかはしける

槇の戸を西に明けてやながむらむさきたつ月にことづてをして

國基

月の入るそなたを明けてながむれば君思ひづるつまどなるかな

返し

（以上康資王母家集）

後柏原院

神はその人に上津瀨下津瀨の御祓もおなじ波にうくらむ

稱名院前内大臣

もろ人のちわきにわけて思ふことけふみな月にはらへはてゝむ

爲明卿

けふといへばあさの末葉の露の間に千代の數そふ御祓をぞする

常陸

すべらきの長居の池に水すみてのどかに千代の影ぞ見へける

（以上延文御百首）

立春　御製

住吉やあふぐ惠みの春たちてさきいでむ花をまつのことの葉

梢蟬　忍戀

風もすゞしなく蟬のはのうすみどり中にまぢりて茂る梢は

あさはかに洩しやそめむとくもわれ忍びはつべき思ひならねば

江霞　道晃

淡路嶋あはとはるかに住の江の春にかすむもあかぬ色かな

朝萩　資茂

袖ふれてあかず分けみむ行くすゑも遠里小野の萩の朝露

木間月　共綱

なみたてる松を秋風吹くからにもりくる月も住吉の浦

名所松　雅章

瑞垣のひさしきよゝり言の葉の散りうせぬかげや住吉の松

社頭祝　弘資

君によりいまぞさかへむ住吉や神代の松の言の葉の道

（以上寛文四年靈元天皇御法樂）

早春　御製

はるかにも霞そめけり住吉や神代の春のおきつしら波

夕契秋

大空の月をぞあふぐいにしへも今もかはらぬ秋の光に

述懷

老いずばとけふこそあふげ住吉の神の手向に身をも忘れて

江上霞　通茂

住の江やそこもみどりの海かけて松風霞む春のうらなみ

郭公　豐長

岸に生ふるまつとせしまに住吉の里なれにける郭公かな

夏月涼　時成

住の江や夏をもさらにわすれ草うら波きよき月のみるめは　　俊廣

雨夜虫

よるの雨の枕とひよるむしの音を遠里小野のとほくやはきく　　淳房

初冬

ふゆきぬとしらゆふかくる霜にけさかえ見すらし住吉の松　　通躬

時雨

住吉の松のみどりをそめかねてあらしのよそに行くしぐれかな　　隆豐

寒草

ふゆ枯をわするゝくさや住吉の岸根の霜になほのこるらむ　　季保

冬月

おきつ浪月影ふけてすみよしや松ふく風のこゑもさむけし　　弘資

積雪

世につもる詞の花をかたそぎのゆきあひしろき雪にみすらむ　　氏信

曉寢覺

墨の江の松のとぼそのあけがたにゆめを殘してよするうら浪　　基淵

寄松祝

あふぐぞよちりうせずして住吉の松のことばの道のさかえを

（以上靈元天皇天和三年御法樂）

初春

住の江の春をむかふる今よりや花をも松の千代のことのは　　御製

浦早秋

住吉の浦めづらしく吹きかへて松のこゑそふ秋のはつかぜ

言出戀

さばかりの色やはみえぬうち出でていふにもさはぐむねの思は

呼子鳥

しるべとはこのまぬ山の呼子鳥たゞなほざりの人やさそはむ

絶戀

つひにかくかはる心をくやしくも年月しらで何たのみけむ

惜秋似戀

ながめなれし秋のわかれはあひ思ふ名殘ににたる袖の露けさ

孀閨冬來

あはぬ身はいく春秋の閨の中にまたとしつもる冬も來ぬらむ

都立春

名にしおふことばの花の都より色香をよもの春やたつらむ

神樂

住吉の松にならへとさかきばをとりかへしうたふ萬代の聲

初春松

住吉やおなじみるめもあら玉の春のうみべや松のひとしほ

雨後鶯

雨はるゝ軒ばのごかに朝日影うつればうつるそのゝうぐひす

鹿聲兩方

われひとりねをこそたてねすむ山の峰にも尾にも鹿はなくなり

路芝

ふむ跡やさぞなまれなるみどりさへ野邊よりつゞく宿の道芝

首夏藤

よそにみてかへりし春の心にもかけてやしのぶ藤なみのかげ

河邊擣衣

里ちかきよるの河風身にしむや賤がきぬたの打ちもたゆまず

葦間薄氷

かれてふす末葉ぞとづる朝氷あしのひとよのうすきながらに

夏獸

夏野ゆくをじかもしるやねになかむ秋を眞萩も花にまつとは

花下逢友

さそはぬもおなじかた野の櫻狩花のこころにいざくらしてむ

なびく玉藻の

瀬をはやみさそはゞ水のひさかたに靡く玉藻の根をやたえなむ

山霜　玉島河　兼淵

秋だにも露さむかりし山かげは消えずや霜のまづこほるらむ

伏見里　筑波山　淳房

玉島やかすみのみおの春風にこの河かみもこほりとくらし

隣擣衣　尋綱代　宗尚

年へても逢ふ夜はしらでくれ竹の伏見の里は名のみなれとや

寄硯戀　公前

知りながらこふるは苦し筑波山このもかのもにかくるならひを

衣うつ聲にめざめて山かづの夜さむたらふ宿やまぢかき

夕霧にしめるかゞり火影わかでしるべもたどる宇治の網代木

松上霞　岸春草　荻風　欲入月　嶋雪　祝言　名所松

いさめける硯の上の手習ひもものの思ふ時のすさびにはして　爲綱

ひとむらの松原ちかく行く舟も霞にみゆる住吉の濱　濟深

住の江や岸ねの松にいく千世の色をかちぎる春の若草

吹くからに秋をもつげつ住の江のきしねの松の風の下荻

住吉や浦よりをちに影ふけて月ぞかゝれるあはぢ嶋山

すみよしの浦波はれてあはぢ嶋神のみまへにむかふ白雪

まもるよりなほいく千代も住吉の神にたむけむ松のことのは　豐行

ふかみどり色どる波のみるめこそすみがきならぬ住の江の松

寄神祝　基　凞

君もきみしるのことばの手向草千世もとやみむ住吉の神

海邊月　宗　尚

みるにそのあまも心やすみよしの名にくもりなき月の光は

松爲友　通　清

言の葉もいくよさかえむ住の江の松を神代の友と契りて

寄松祝　幸　仁

ことのはのつもる手向を住吉の神も嬉しとまつことにせむ

松霜　有　慶

かげふかみ榊葉ならぬ住吉の松にもかゝる霜の白ゆふ

隔浪見花　基　凞

住吉のむかひの花はおきつなみこすかあらぬかあはぢ嶋山

寄神祇祝　家　凞

住吉や君が手向のことのはを松にならへとさぞまもるらめ

江上霞　資　凞

すみのゑやゆふべ曙をり〳〵のかすむ光も春にくもらぬ

朝納涼　公　照

たちよりてきけばすゞしき住の江や明けゆく波の松風の聲

名所月　雅　量

松にふく風をひかりに住の江や月影みがくおきつしら浪

社頭祝　兼　凞

我君のことばの色に住吉の松もちとせのかげやそふらむ

若菜　實　種

住吉の淺澤小野におひいづる若菜は神のたむけにやつむ

河藤　藤原相尚

住の江や春をときはに松の花咲くかとみえてにほふ藤波

夏秡　長　義

御祓する袖ぞすゞしき住の江の松吹くかぜも秋にかよひて
　　翫月　　時香

沖つ波いくよをかけて住吉やうらのみるめのあかぬ月影
　　神祇　　實陳

住吉の松をためしにことのはのさかゆく道を神ぞまもらむ
　　祝言　　資淵

すみよしの松のちとやよの中の君がよはひのためしなるべき
　　朝藤花　　重條

沖つかぜなぎたるあさは藤なみものどかにかゝる住吉の松
　　波間月　　爲綱

神もさぞ心をよせて住の江のみるめや波の月にかるらむ
　　寄社祝　　兼淵

君がため松のことのはつきせじと跡をやたれし住吉の神
　　社頭紅葉　　長義

住吉の松のこのまの紅葉ばに神もこゝろの色やそむらむ
　　雪間若菜　　輝光

都びと雪間とめきて春もまた淺澤小野のわかなをやつむ
　　摘菫　　通茂

咲く萩は遠里小野につむすみれ秋やゆかりの色にしのばむ
　　名所松　　輔實

よせかへる波にぞなれてかげたかく幾世ふりぬる住吉の松
　　眺望　　通誠

住吉の浦なみかけてかすむ日にとほざかりゆくあはぢ島山
　　社頭祝言　　輔實

住吉のさかゆく松のふかみどりよゝふる神の宮居たゞしき
　　夏社　　通茂

みづがきの松にことゝへほとゝぎす神代の月も住吉の濱
　　澤畔菊　　時香

咲きあまる影うつす水の淺澤も菊はにほひの淵となりぬる

寄神祝言　兼　淵

たむくるを神もうくらし住吉の松をためしの君がことのは

春たつけふの　濟　深

住の江や春たつけふの朝ぼらけいつしか霞む波のおちかた

神代のことも　爲　綱

跡たれし神代のことも住吉の松はしるとやときはなるかげ

ちとせのためし　綱　平

君が代のちとせのためし住吉の松にみせてや蔭しげるらむ

藤　基　勝

住吉の松のこずゑにむらさきの色をふかめてかゝる藤波

祝言　實　久

ちとせつむ君がよはひは住吉の松にもみよといやさかえ行く

住吉浦　雅　豐

住吉や松ふく風もさえ〳〵てけさ雪しろきあはぢ嶋山

暮春　基　福

住吉の岸につまばや忘れ草あかずもくるゝ春のなごりを

社頭月　實　久

ところから月の光も住吉の神のみまへぞわきてさやけき

岸菊　淳　房

霜の後を松にちぎりて住の江の岸にやにほふ千世の白菊

寄江戀　藤原相　尙

忘れ草今やおひけむ住の江の松にこぬ夜のつもるつらさは

寄鏡神祇　重　條

ますかゞみ光そへてや敷嶋のみちまもります住吉の神

社言　俊　廣

住吉の濱の眞砂にすむ鶴は松よりほかに君が千世みむ

江寒蘆　有　慶

朝日さすみぎはあらはに住の江や枯れゆく霜の芦のむらたち

社頭祝　輔實

我君が千世をぞいのる住吉や神の御まへの松にちぎりて

（以上天皇元祿六年御法樂上卷）

浦早春　御製

神代よりいく春かぜの浦なれてふきそめけらし住吉の松

海上雲遠

海ごしの山をいでてや雲はけさ千里のすゑの浪にうかべる

新竹

ちひろあるかげに生ひそふ若竹はなほ末遠き世々をこむらし

朝荻

おもひあへぬあしたのまゝにうき秋の聲ふきたやめ荻の上風

はつ鶯の

もゝ鳥もさそはれよとやおのがねを初鶯の春つげてなく

柳のまゆぞ

春にまづ柳のまゆぞひらけぬる花は匂はぬしづが垣根も

夏は綠の

たちぞ寄る木の下風の涼しさに夏は綠のかげをもとめて

袖の氷は

かげさゆる月にもいかゞかこたれむ心と結ぶ袖のこほりは

被忘恨戀

知るらめやつひに忘れしつらさまでそへても嘆く今の恨を

春秋野遊

春秋とうつる心をいくたびか野なるくさ木の花にみえけむ

梨

片枝さす花のひかりをくらべても涙より白きおふのうら梨
初秋扇

このころの初秋風に忘れゆくあふぎやなれし袖をうらみむ
社頭殘菊

雁なきし秋ののら菊枯れずなほのこれお前の濱のみるめに
橘知昔

にほへなほ世々の都の始めより植ゑしくもゐの庭のたちばな
雁勝喚子鳥

あかでこそとばかり歸る心には似るべくもあらぬ喚子鳥かな
柏霰

碎くてふ名にのみたへる玉柏散らぬ梢にあられをぞみる
浦鶴

住吉のうらになく鶴夜やさむき霜にやうすきおのが毛衣

霞始聳

住の江や春もてはやすみるめとは霞やそめしあはぢ島山
水郷卯花

春ならぬ垣根にさける花の名のうらのわたりを誰か訪ひみむ
はねかく鳴も

きゝあかす身の爲秋のうきかずははねかく鳴も數へしらしを
社頭曉

住吉の濱邊は霜をみるつきもまだ宵ながらあけの玉垣
松霜

暮れていにし秋のなごりをませのうちに霜もさながら殘る白菊
濟深

豪

住の江や浦よりをちのなみ風にしぐれてきおふ空の浮雲
納涼　雅量

草の名に夏をわすれて住の江やきしね涼しく松風ぞ吹く　綱平

寄神祝

神がきやめぐみも春にあらはれてみどりそひゆく住吉の松　仲賢

分萩

そでぬれてあかず分けみむかへるさは遠里小野の露の眞萩も　定經

神社

あふげなほやまとしまねは動きなきよに住吉の神の宮居を　資淵

江上眺望

すみよしや霞も霧も夏の日は江の水とほくはれてしづけき　俊廣

寄社頭祝

住吉やあけの玉がきへだてなく君をば守れ松のちとせに　爲茂

風

住吉やすゞしき浪のよる〳〵は松にならせるうら風のこゑ　實種

海邊盧橘

松ならでむかしをとはむ住の江の浪さへ色にかほるたちばな　實業

海早春

ちさとにもたつや浪路の春みせて今朝こそかすめ住吉の浦　實久

名所里

君がへむちよをちぎりて住吉のさとのしるべは松も見すらし　俊清

深雪

住吉の松のみどりはうづもれて雪しろたへにあくるみづがき　雅豐

梅雨

浦人もはれまをいつと住吉のまつやひさしきさみだれのそら　宣顯

明月

まつかぜに夕霧はるゝ波のうへに光もきよくすみの江の月　家淵

祝言

住吉の岸ならねども幾世をかこゝにみどりの洞の松が枝

藤埋松

住の江や松のみどりも色かへてこきむらさきに匂ふ藤なみ　紅葉深　實種

住吉や松よりほかはをしなべて木々のもみぢもあけの玉がき　海邊菖蒲　通躬

あやめ草ながき根ざしは住の江のきしなる松をためしにや引く　ゆふしでかけて　雅豐

惠あるよはたれもみな住吉をゆふしでかけてあふぐ神かき　名所眺望　重條

住の江やあかぬみるめは曙の波間にうかぶあはぢしま山　江花　宗尚

あかずなほ心をよせよ涙かぜもさくらにかほる住吉のはる　神社　實業

言の葉の手向もけふは滿つ潮にあらはれし神やうけて嬉き

（以上天皇元祿六年御法樂下卷）

初春松　御製

春はまづかすみわたりてかみがきの松も色そふ住吉のはま

菖蒲　契戀

ねや近き花たちばなや一夜しくあやめのねたくにほふ手枕

浦霞　直仁

末しらぬなげの情の言の葉をしひてたのむもうき契りかな

新秋露　內前

松が枝のみどりをこめて住吉の浦なみ遠くかすむのどけさ

望雪　宗家

住吉のはまべすゞしく秋のきて眞砂にけさはおける白露

不逢戀　貞建

住吉のうらのむかひに降る雪を見せてぞうかぶ淡路嶋山

神よしれ千木のかたそぎ行合ひてつらき月日につもる思を

眺望　兼胤

いづくかとこゝに眞砂のはる〴〵とみるめもあかぬ住吉の濱

述懷　雅香

あふぐぞよ言葉の道も榮えゆく世に住吉の神のめぐみを

社頭祝　光榮

いく千代ぞ神代の風もことのはに傳へてあふぐ住吉の松

（以上櫻町天皇延享元年御法樂）

初春　御製

住吉の浦わの松のことのはのいろそふ千世をいはふはつ春

里郭公　御製

いづくにもまたで聞くらし郭公里はかずなくこのころのこゑ

船中月

さやかなる月にうかれて行く舟は泊もしらずめであかすらし

早秋　尚實

このあさけ松にをとして住吉のうらわをわたる秋のはつかぜ

松雪　雅香

はらふべき風は音せでふるまゝに雪ぞつもりの浦の松が枝

眺望　雅重

沖つ浪はるかに松のこのまよりみるめにあかぬすみよしの濱

寄松祝　職仁

住吉の松のことの葉千世かけてさかふるいろを君にみすらし

（以上桃園天皇御法樂）

早春　御製

住吉の松ふくかぜもさらにけさ千世の聲そふ春はきにけり

菊久馥　御製

ところからさかりふりせし住吉の濱邊の秋ににほふ白菊

積雪

松竹のけぢめばかりはやゝ見えて積るも深きけさの白雪

述懷

まもれなほ神の惠につたへきてあけくれあふぐ言の葉の道　公明

岸柳

住の江のきしねの波のしらゆふをかけてぞなびく青柳の糸　道前

夏月涼

風かよふ松の木の間をもる月の光すゞしきすみよしのはま　隆淵

月契秋

ところから松をためしに住の江の月は千とせの秋契るらし　爲敦

時雨

住吉の松の梢におとたてゝうらかぜ遠くしぐれ降るなり　隆望

氷初結

住の江や松ふく風のさゑ〳〵て岸根傳ひにこほりそむらし

冬月

さむけしな月かげはれて住の江の岸根の氷てらすよな〳〵　内前

浦船

綱手縄かけて幾世に住吉のかみをしるべの和歌のうら船　爲村

寄松祝

住吉の松をためしにすべらぎのこと葉の手向いく世つきせじ　職仁

（以上後櫻町天皇明和四年御法樂）

早春

まつの葉の去年のみ雪も忘草あふてふ岸のかすむ初はる　御製

雪中梅

ふりつもる雪ににほひて白たへの色みえまがふ梅の初はな

月契秋

いくかへりつきぬ契りは久かたの空にてりそふ秋の夜の月

積雪

行きかひのしげき都の大路だにあとわかぬまで積るしらゆき　浦船

住の江や千世松かぜも音そへて波路ゆたかにいづるうら舟　寄河戀

河水の流れて絶えぬとばかりにかはるせしらずなに頼みけむ　岸柳　織仁

すみよしの濱風ゆるくうちなびき緑なみよる岸の青やぎ　春曙月　實種

住吉の松のみどりもかすみゆく月をなみまにむかふあけぼの　郭公　持豐

住吉のまつにかひある聲ながら遠里小野のほと〻ぎすかな　夏月涼　通根

こぬ秋の影もかよひて住の江やよる〳〵すゞし波のへの月　通知

擣衣

浦風のよさむかさねて住吉のさとはる〳〵ところもうつころ　時雨　忠尹

幾たびかしぐれてもなほ住吉の松のみどりは色もかはらじ　寒草　資矩

もゐいでて緑にかへる春の色は遠里小野のしもの下草　冬月　美仁

千鳥なくあはぢしま山風さえてこほれる月の住吉のうら　寄草戀　伊光

草の名の忘るまもなき住の江や岸うつ涙のよるのおもひは　江邊霞　爲泰

松かげの涙のよるべのゆたかにも霞たなびく住の江の春　初春

（以上寛政九年光格天皇御法樂）

御製

みづがきの松の緑もひとしほにみえてかすめる春は來にけり
雪深　萬實

さもふかき惠あまねく白妙のひかりふりつむ住の江の雪
海霞　隆純

沖つ風吹けども見えぬ住吉のはま松が枝にかすみたなびく
春雨　韶仁

住よしの松のかすみも打ちしめりみどり色そふ春雨の空
翫花　爲善

世に廣く匂ふさくらの花なればさぞ住よしの神もめづらし
落花　龍光

よる波と花をさそへば眞砂地に春風にほふすみよしのはま
郭公

神きけと松かげとひてほとゝぎすいく聲もらす住吉の濱

菖蒲　齊敬

そこまでもにごる時なく住の江にしげる緑のみどり涼しも
早苗　通繫

住吉のきし田のさなへとり〴〵にちとせせとうたふ民のもろ聲
夕立　爲全

夕だちははまべをすぎて住吉へまつにすゞしくのこる浦風
聞虫　雅久

秋風にたぐふをきけば鳴くかたも遠里小野の虫のこゑ〴〵
紅葉　雅光

御社のまぢかきもみぢ染めしより神やみるらむ住吉の秋
寒蘆　廣長

住吉のはまべの霜のかげみれば浦かぜ寒きあしのむらだち
顯戀　俊克

あらはれてくやしきなかは住吉の戀忘れ草名もあらばあれ

浦松　雅典

浦みればいくとし波を契りをきてみどりさかふる住吉のまつ

海路　幟仁

住吉の松のかげよりはるゞとむかへばなみの淡路しまやま

眺望　公祐

住吉の浦のむかひのあけぼのに淡路の島もあはくみえつゝ

神社　爲則

この道のさかえまもりて住吉にひかりをこめし神のみやしろ

（以上仁孝天皇天保十三年御法樂）

岸柳　松月庵正徹

かれゞに見ゆべき色を忘れ草あふてふきしの春の青柳

江月

みせばやな松の葉つたふ有明も細江のはしに高くのこるを

夏秋

おりふしも知らぬ田蓑の島人も今日はなごしのみそぎすらしも

（以上文安二年住吉社奉納百首和歌）

住吉浦

住吉の浦風さむく月落ちて氷をのするあまの釣舟　源菅雄

住吉浦

住吉の浦風遠く聲あれて波の冬をやよそにしるらむ　藤原一雄

（以上貞享三年奉納百首和歌）

早春

墨の江に春のけしきをまづみせてかすみ初めけり淡路嶋山　津守朝臣國教

立春風

春きぬと立つ涙風の音までものごかになりぬ住吉の濱

（正德二年奉納和歌）

海邊霞

住吉のうら吹く風ものごかにて波間にかすむ淡路嶋山　參議左大辨藤原光榮

寄神祝

敷嶋の道のめぐみも末とほくきみが代まもれ住吉の神

（以上享保六年奉納和歌）

右近衛將監藤原氏房

海邊霞

神もさぞみるめはあかし住吉や春のうみべのかすむ朝なぎ

五月雨

名にかへてふかくぞみゆる住吉の淺澤ぬまの五月雨の頃

雪朝望

けさみれば雪をうかべて住の江やはれたるなみのあはぢ嶋山

寄松祝

守れなほときはかきはに君が代をちとせせといのる住吉の松

（以上享保十五年奉納和歌）

兵部少輔津守國輝

對月

あかでのみめづる心も住の江のきしねの波に浮む月かげ

早春

住の江やまつの雪げの淺みどりまだきやはらぐきしの春風

（以上寛保四年奉納和歌）

宗匠家爲村卿

尋花

このもとは遠里小野のさくら花風のにほひをとめつゝぞゆく

秦千弘

三月盡

けふのみとくるゝぞ惜き住の江やかすむ浪路の春のみるめは

爲村

待郭公

住吉の松はひさしきほとゝぎすきしうつ浪のこゑそへてなけ

秦惟石

郭公遍

をのが音はなほもおしまで住吉のまつにかひある山郭公

廣會久氏

螢

住吉のうらの入江にとぶ螢浪の玉藻の光見すらし

荒木田武住

立秋

松の風けさ吹きかはる聲そへて涙も秋たつ住吉の浦　秦千弘

虫

たぐへ來る風にまぢかく聞ゆなり遠里小野の虫のこゑ〳〵　宗匠家

海月

須磨明石いづこはあれどこゝはなほ海べの月の住吉の秋　秦家義

擣衣

住の江の涙にたぐひて風さそふ遠里小野にころもうつなり　宗匠家

暮秋

すみよしの里の夜寒に雁なきて菊さく秋ぞふかくなりゆく

霜

鷺の毛のそれかとみえて住の江の松の葉しろき枝のあさしも

松

すみのゑやたむくる松のことの葉の百枝にふくも和歌のうら風　秦紀貞

述懷

ゆく末の道のさかえをおもふにもめぐみをあふぐ住吉の神　荒木田武一

祝

言の葉の道にしげりて幾代々もさかえひさしき住吉の松

（以上寶暦二年奉納和歌）

民部卿藤原爲村

きしの松いろそふ春の初入りもかすみにしるき住吉の浦

住吉のきし田に賤がおりたちて松のいろそふわかなをぞつむ

ほどこそは遠里小野の花ざかりふきくる風のかほりにぞしる

すみよしの松にかほりてさく藤はことばの花のいく千世のかげ

住吉の松としりてやほとゝぎすきしうつ涙のよる〳〵のこゑ

おもひやは淺澤沼にとぶ螢かげこそうつせ消つかたもなき

みぬさとる御前のはまの夏はらへ清くすゞしき松風ぞふく

雁も鳴き菊さきそめて住吉のさとの夜寒にころもうつころ

ものゝ音もなほ住吉の里かぐらまつ風たかき月に聞えて

旅衣立ちいでてみれば武庫の浦のそなたにかすむ住吉の松

住吉のきしかたとほくかけて身に惠もこゆる老のとし涙

むつまじき道はこの道みづかきの久しくきみが御代に榮て

（以上明和五年奉納和歌）

沙彌澄覺

十三夜月

月影もまさごの霜もすみよしや菊さく秋の名をみがくらし

月前風

きしの松葉分さやけき秋かぜにくもらぬかげも住の江の月

月前雲

かげはるゝ月をばよぎて住吉の浦涙とほくうかぶしらくも

月前時雨

はるゝ夜の時雨はまつの風のねもみにしむ月の住の江の秋

月前浪

起きかはる涙のをちこちへだてなくげに住の江の秋の夜の月

野月

よし道は遠里小野の遠くともうかれてゆかむ月の夜すがら

江月

なみかぜもなほ住の江の秋のそら松にくもらで月ぞふけゆく

浦月

かりなきて夜さむの月のかげはるゝ秋のみるめは住吉の浦

社頭月

くもりなくてらすも世々の神ごころ住の江殿の秋の月かげ

里月

住吉のさとの秋風ところから月によな〳〵吹くもさやけし

月前荻

みにしみてふけゆく月の住の江や秋風たかき松のした荻

月前菊

のちの秋花さくきくも白妙の月のしも夜のすみよしのはま

月前松

江をきよみ松を秋風ふくまゝになほ住吉の月ぞすみそふ

月前紅葉

乘る船をよせてみぎはに住吉や月のしたてる岸のもみぢ葉

月前鴈

いくかへり月すむ秋を住吉のまつに契りてかりもきぬらむ

月前鷺

くるゝ夜のねぐらいそがで飛ぶ鷺のつばさに月も住吉の松

月前松虫

千とせをや月すみよしと契るらむ名も相生のきしにまつ虫

月前鹿

ともなひて月にたつらし眞萩咲く遠里小野のさを鹿の聲

月前擣衣

せこをさぞ松かぜ寒き月の夜にこひもうつらし住吉の里

月前笛

かげはるゝ月はすみよし青海の波のしらべをうつす笛の音

月似古

あひ生の松のむかしの秋かけておなじひかりに住の江の月

月似雪

ひろまへの月の光を浦の名のつもりし雪のいろかとぞみる

寄月眺望

沖つかぜ松ばら遠くはるゝ夜の月をみわたすすみよしの浦

寄月夢

ひかりをもつたへて昔みし夜半の夢あきらけき月は住の江

寄月述懷

のこる名をあふぐ心も住吉のきしかたとほきよゝの月かげ

寄月神祇

まもるより月明らけくつく道のひかりかしこき住吉の神

寄月祝言

月の秋も五百七十の末遠くめぐみかげそふ住吉の浪

（以上安永二年奉納和歌）

松平定信

朝霞

住吉の松に聲なき朝なぎにかすみいろある沖つ白なみ

七夕

あすよりは歎きつきなむたなばたの稀の契の行合の杜

江月

住吉のまつのあらしに雲晴れて細江にあまる月の白妙

千鳥

神さびし宮居靜かにさよ更けてちどり鳴くなり住吉のうら

浦松

浪の聲も萬代よばむわだづ海のみどりにつゞく住吉の松

祝

あひにあふ神と君との惠にていづこもひとつ住吉の里

（以上住吉の社奉納和歌）

從三位中臣延樹

萩露

分けのこす遠里小野の眞萩はらこのゆふ露のあかぬさかりを

寄松祝

これもなほいく千世つもれ住吉の神に手向けの松の言の葉

（以上春日奉納和歌）

正四位下中臣光知

浦霞

のどけしな嵐も絶えて住吉の松よりかすむうらのみるめは

（春日奉納和歌）

津守國治

寄神祝

代々つきぬはまの眞砂を敷島のみちを守りの住よしの神

（春日奉納和歌）

肥前守源淵

すみよしの浦ふく風もしづかなる御代のすがたのやまと言の葉
浦かぜにこゑうちそへてすみよしのきし田の早苗今やとるらむ
かみがきのまつのはごとにてる月のひかりすゞしく住吉のはま

（以上夏日奉納和歌）

月前松　　從三位爲紀

幾千たびかげやどしけむすむ月と同じときはのきしのひめまつ

（以上秋日奉納和歌）

霞　　從二位行民部卿藤原宗家

住よしや春たつ波の音もせでのどかにかすむ浦のあさなぎ

若菜　　苗代

春はまだ淺澤小野の雪こほりまづかきわけて若菜をぞつむ

荻

住吉のきし田にしめを引きはへて水口まつる賤がなはしろ

うらなみに聲うちそへて住の江の松の下荻そよぐ秋かぜ

月雪

霜もやゝおきつしほ風ふくる夜にさやけき月の住吉の濱
ふる雪の津守のうらの松が根におきつ白波よるかとぞみる

（以上冬日奉納和歌）

若菜　　源雅

春はまだ淺澤小田にふる雪の袖打ちはらひわかなつむなり

春月

とはゞやといひし昔もしられけりげに住の江の春の夜の月

早苗

豊なる御代をよろこぶたみなればむべ住吉の早苗とるかも

夏秡

みそぎする夏のしるしのなかりせば秋と夕邊の住吉のはま

江月

ふりにける松の梢をてるかげはいや住の江の秋の夜の月

浦月

浦かぜもしづかに更くる秋の夜に名も住よしの月のかげかな

社頭雪

かすみたつ春の海邊もさもあれど雪にみどりの住よしの松

寄雲戀

住吉のまつのこのまに見てしよりたえず心にかゝるしら雲

寄草戀

わすれ草おふらむものをひとりのみ世に住吉のまつぞ久しき

名所松

住吉のまつも色そふ春の日に神のちかひのしるしみてしか

神祇

たえずなほ世に住吉をいのるかなその源はきよきながれの

祝言

萬代も住吉をこそあふぐなれ松のことのはちりうせずして

（以上奉納百首和歌）

權中納言藤原爲久

霜ゆきもわすれ草おふる住吉のきしのしら波春やたつらむ

沖つかぜ吹きこす花のしらなみはあらへどぬれぬ住の江の松

風ふけばかゝれる花のふぢなみにころをばゆづる住吉のまつ

をちかへりきなく五月のほとゝぎすなれもこゝにや住吉の里

住吉や植ゑる岸田のわかなへに秋たちそはむ穗なみをぞ思ふ

露わくる遠里小野の遠くとも行きてこそみめ秋はぎのはな

波もたゞこゝによるかと住の江の松のした荻うら風ぞふく

ながゐして秋をやこゝにをくらまし夜毎に月の住吉のうら

松の葉のちらぬためしをしら菊の花にやちぎる住吉のはま

打出でてみるめもあかずしら雪の津守のうらの涙のあさなぎ
冬がれの淺澤小野のわすれ水有りともみえずこほるころかな
住吉となれもやおもふ日かげさすおまへのはまにあさる水とり
住吉の松のこかげのさよかぐら千世をかけてやさゝうたふらむ
住吉の松ばら遠くあくる夜によこ雲わたるあはぢしまやま
あはぢ嶋むかふそなたにゆくふねのあと遠ざかる住吉の岸
この神のまもれる國はいづくをもみな住吉の里といふべく

（以上奉納百首和歌）

春日

從二位藤原爲村

きえがての雪は春をや忘れ草生ふてふ岸にさえ殘るらむ
ゆくほども遠里小野の花ざかりほのかにみえてにほふ春風
みしめひきせき入る水も住吉の岸田にぎはふ苗代のころ

住の江やそこもみどりの松が枝にいろはへてさく岸の藤波
住の江のまつことにせしほとゝぎす岸うつ涙に聲もまかはず
生くる根に淺澤沼もあさからで深くもかほるあやめ草かな
住吉のきしたにうゑて松の葉のみどりのさなへ色ぞすゞしき
すみよしの御前の濱にみそぎして秋をかけたる波のしらゆふ
つゆもまだ淺澤小野の花すゝきほのかにみえて秋風ぞふく
雁なきてまたれしきしの花や咲くはまかぜにほふ住吉の秋
ふきしほるあらしの袂ふりはへてゆくかげさむきあられ松原
松風もことにかよひて住吉の御前のかぐらこゑぞ夜ふかき
いくちとせ契りをこめて住の江にかげさかえゆく岸の姫松
やすくゆく波路にもしれこの神の綱手をたのむ沖のふな人
住の江の松はいく世の手向草むかしをかくる波のしらゆふ
住の江にかきえぬ涙のもしほ草きしかた遠く年はこへても

58
145

春月

秋こそと秋は見るともわすれじな住の江遠くかすむ夜の月　山口春章

（以上奉納百首和歌）

神祇

守れたゞ松のことの葉ちりうせぬ道のさかえをみつゝおの神　淺井矩永

（以上奉納百首和歌）

社頭祝

ことの葉の道につたなき身ながらもたのむは幾世住吉の神　中院内大臣通躬

（奉納三十首和歌）

恋戀

あはでのみ幾夜津守のうらかぜに恨そへたる秋の夕露　作者不詳

鶴歸皐

住の江やおなじ緑の澤水に松よりかよふ鶴のもろごゑ　宗成

寄社頭祝

世々かけてかはらぬ色をかたそぎの契り久しき岸の姫松　拾悦

つたなきおのがじしの心々に書い列ねて手向け奉るおこがましけれど

小松原なほちりうせぬ言の葉を神の心にまかせてぞみむ　菅雄

（以上奉納三百三十首和歌）

野若菜

幾年もこゝにしめばやわかなつむ遠里小野の春のゆくすゑ　從二位藤原爲久

岸藤

松のうへに藤さく春は住の江のきしによる浪たちまさりつゝ

江月

ゆくすゑの舟路はるかにてらさなむ光をたのむ住の江の月

紅葉

住の江や神代の松の下もみぢこれもいつよりしぐれそめけむ

浦雪

あま人のめかりしほくむあともみず津守の浦のけさの白雪

寄松祝

58
145

住吉の神し守らばわがやどのまつのことのはなほぞさかえむ

夕納涼　　右近衛權中將藤原宗家

あつさをも忘れ草生ふる住吉のきしね涼しき松の夕かぜ

海邊月

波間よりあらはれ出づる月かげはげにくもりなき住吉の浦

名所鶴

住吉の田鶴もやこゝに遊ぶらしこだかき松のかげをたのみて

松

神代より色もかはらでいくとせをつもりの浦の松の木だかさ

海路

波たゝぬ世はいづくをも住よしとおもひやわたる沖つ舟人

祝

する遠く惠をそへて守れなほあさゆふいのる住吉の神

民部卿藤原爲村

松たかきかげたちよりてあつさをも忘れ草おふる岸の白波

いくとせの雪も津守のうらさびてふりゆく松の蔭ぞ木深き

ゆたかにもつるの毛衣たつ春のめぐみかさぬる住吉の浦

野若菜

はつわかなつみこし代々のあとゝめて遠里小野の春を重ねむ

江月

住の江の月にたのみし光こそてらす船路のしるべとはなれ

浦雪

けふいく日津守の浦の雪の中にあまの通路いづくなるらむ

寄松祝

住吉の松を契りにさかえ行くやども久しき言の葉のかげ

初春　　權中納言藤原爲理

浦なみもやはらぎわたるはつ春はみどり色そふ住吉の松

野虫

58
145

すだきけりやどる千種の裏枯は遠里小野の虫のこゑ〳〵　菊契秋

波ならぬちぎりをかくれ住吉のはまべの菊の花のいくあき　曉神樂

ふく笛のねも住吉の里かぐら曉ふかくうたふあかぼし　眺望

松かげにたつ白鷺のかつ見えてなみ晴れわたる住吉の浦　社頭祝

住吉の神のみづがき久しさのさかえを道にこめてあふがむ　江上霞　權中納言藤原兼胤

住の江やうかぶ日かげもうら〻かに浪の千里のかすむ朝なぎ　浦松

浦波のかけていく年すみの江にさかゆく松のかげの木高さ　立春　俊明院

神代よりよ〻にさかふる住吉の松も色そふ春やたつらむ　神祇

みづがきの久しき世より敷嶋の道まもります住吉の神　十夜月　秦廣永

神代より秋のもなかをいくかへりみちくる汐に住の江の月　遠鄉時雨

うきくもの遠里小野に時雨ゆくこなたのそらは住よしの月　早春霞　貞建

春の色をまづみせそめて住の江の松の茂みやけさかすむらむ　暮春　實岳

あはぢ島あはとはるかにゆく春の名殘かすめる住吉の浦　里郭公　爲泰

住吉のさとをばかれず郭公おのが手向けとこ〻に鳴くらし　納涼　爲香